を言ひ出した。女といふものは容易く憂愁から喜悅に移り得る、女の氣分は自分の跡を追ひ廻す男に依つて、左右されるものだなどゝ言つた。ジューリィはむつとして、それは本當です、女にだつて變化が必要です、いつも〳〵同じものでは誰だつて飽き〳〵しますと言つた。

『それなら御忠告しますが、いつそ……』ボリースは一つ皮肉つてやる積りでかう言ひ掛けたが、その瞬間、うつかりしてゐたら自分は目的を達し得ないで、今迄の努力を水泡に歸し、空しく莫斯科を去るやうにならぬとも限らぬ、かういふ忌々しい考へが浮んで來た（そんな事は彼として今まで經驗のないことである）。

彼は話を中途で止めて、不愉快に苛々した、思ひ切りの惡い女の顔を見ないやうに目を伏せた。そして、

『僕は決して、あなたと喧嘩をするために來たのぢやありません。それ所か……』と言つた。

彼は續けてもいゝか何うか窺ふために、ちらと女の顔を見た。彼女の苛立たしさは不意に消え失せて、落着きのない哀願の目が貪るやうな期待の情を帶びて、男の方へ注がれてゐた。「俺は結婚しても、此の女と餘り逢はないやうにするのは易しい事だ。」とボリースは考へた。「それにもう一旦乘り出した船だ、どうしても終ひまで漕ぎ附けなくちやならない！」彼はさつと顔を赤めて、女の方へ目を上げながら言つた。

『あなたは僕の心持を御存じでせう！』

もうそれ以上言ふ必要はなかつた。ジューリィは勝利と滿足に輝き渡つた。併し彼女は普通こんな場合男の言ふことを、無理にボリースに言はせた。つまり彼が自分を愛してゐる事、これまで自分より他の女を一度も戀しなかつた事などを、男の口から言はせた。ジューリィはペンザの領地とニジニ・ノヴゴロッドの森に對しても、これ位の要求をしてもいゝと考へたのである。そして首尾よく要求通りの返事を得た。

婚約の男女はもう自分達に「暗と愁ひを振ひ落す木」の事は曖にも出さないで、彼得堡に於ける華麗な住宅の設備について、樣々な計畫を立てたり、訪問したりして、花々しい結婚式のためにあらゆる準備を整へた。

六

ロストフ老伯爵は一月の末、ナターシャとソーニャを連れて莫斯科へ着いた。夫人は依然として健康が勝れないので、旅行する事が出來なかつたが、夫人の恢復を便々と待つてもゐられなかつた。アンドレイ公爵の莫斯科來着も、今日か明日かと待たれてゐるし、嫁入の荷物も買はなければならず、莫斯科近在の領地も賣らねばならず、老公爵の莫斯科滯在を利用して、未來の嫁を引

き合せなければならなかつた。莫斯科のロストフ邸は煖爐も焚いてない上に、夫人も同道してゐない事だし、ほんの暫くの逗留でもあるしするので、老伯爵は兼々宿をするからと言つてゐた、マリヤ・ドミートリエヴナ・アフロシーモヴの許へ泊る事に決めた。

ロストフ家の四臺の荷馬車は夜遅く、古廐町（スタラーヤ・コニューシエンナヤ）なるアフロシーモヴの邸へ乘り入れた。アフロシーモヴはたつた一人暮しであつた。一人あつた娘はもう片附けたし、息子達はみんな軍務に服してゐた。

彼女は依然として生一本（きいちほん）に振舞つて、依然として誰に向いても遠慮なく、大きな聲できぴ〳〵と思ふ存分言つて退（の）けた。彼女の存在それ自身が他人のあらゆる弱點、慾望、溺惑を譴責してゐるやうな鹽梅であつた。彼女はそんなもの、可能を承認しなかつた。朝早くから短上衣（カツフエイカ）を着て家政を執り、それから外出する。祭日ならば先づ祈禱式へ、祈禱式から要塞や監獄へ出掛ける。一體こんな所に何用があるのやら、曾て人に話した事がない。平日ならばちやんと身なりを整へて、毎日のやうにやつて來る樣々の階級の訪問者を自宅で接見する。それから晝食になると、豐富で美味な食卓にはいつも三四人の客がある。食後ボストンの勝負が始まる。夜は新聞や新刊書を讀ませ乍ら、自分では編物をするのが常であつた。訪問は例外でごく稀にしかなかつたが、若し出掛ける事があれば、市中でも一番有力な人々の所ばかりであつた。

ロストフの一行が到着した時、アフロシーモヴは未だ床に就いてゐなかつた。控室の戸は寒い外氣から入つて來たロストフ主從を通し乍ら、きいと滑車を鳴した。彼女は眼鏡を鼻の頭へずり落し、首を後ろへ反らし乍ら、廣間の戸口に突つ立つた儘、いかつい腹立たしげな顏附で入り來る人々を眺めた。若し此の時彼女が、客人や荷物を何處へ何んな風に入れろ、といふ行き屆いた命令を召使に授けなかつたら、彼女は客人達に恐しく腹を立ててゐて、今にも追ん出しはしないかと思はれる程であつた。

『伯爵のかい？ 此方へ持つておいで。』彼女は誰にも挨拶しないで、鞄など指さしながらかう言つた。『お孃さん二人は此方へ——左側の部屋へね。これ、お前達は何をぺちやくちや喋つてるんだえ！』と小間使に向つて怒鳴つた。『湯沸（サモワール）を早く暖めるんですよ！ あゝ、大分肉が附いて綺麗になつたねえ。』寒氣に頰を赤くしてゐる、ナターシャのコートを攫んで引き寄せ乍らかう言つた。『おやおや、冷いこと！ さあ、早く外套をお脫ぎなさいよ。』手を接吻しようと近寄つて來る伯爵に向いて、彼女はかう叫んだ。『屹度ぶるぐゝ慄へてたんでせう！ お茶の時にラム酒を上げますからね！ ソーニュシカ、bonjour（今日は）』とソーニャに向いて言つたが、此の佛蘭西語の挨拶で以て、ソーニャに對するや、輕蔑の籠つた同時に愛想のいい態度を匂はせた。

一同が外套を脫ぎ、道中の亂れを正して茶の席へ出たとき、アフロシーモヴは皆の者を順々に

接吻した。

『よく出て來ました。そしてよく家へ泊つてくれました。心から嬉しく思ひます。』と彼女は言つて、『もう疾うから機が來てゐたのです。』と意味ありげにナターシャを見遣つた。『お爺さんは此處にゐるし、息子さんの方は今日か明日かと、皆で待つてゐる處だからね。どうしてもお爺さんに合つて置かなくちやいけません。いや、此の事はまた後で話しませうよ。』彼女はソーニャを尻目にかけ乍らかう言ひ添へた。其の目附は「ソーニャの居る處で此事を話したくない」といふやうであつた。『所でと、『彼女は伯爵の方を振り向いた。『明日あんたどうなさる？誰を呼びにやります？シンシンさん？』と指を一本折つた。『泣蟲のドルベッカーヤ夫人？——これで二人と。あの女は息子さんと二人で此處にゐますよ。息子さんは近い中に結婚するさうです！それからベズーホフさんですかね？あの人も妻君と一緒に此處にゐます。妻君の傍から逃げ出した所が、妻君の方がまた追つ掛けて來たんですよ、あの人は水曜日に家で御飯を食べて行きましたよ。さてこの人達は、』と彼女は二人の令孃を指さして、『明日わたしがイエールスカヤの所へ連れて行きませう。それからオーベル・シャリメへも寄らなくちや。すつかり新しいのを拵へるんでせう？併しわたしの眞似なんかしちや駄目ですよ。この頃は袖がこんな風なんですからね！先達てイリーナ・ワシーリエヴナ公爵令孃がいらしつたが、見るも恐しいやうでしたよ。まるで樽を二つ腕にくゝり附けたやうなんですよ。全く此の頃は一日々々で流行が變るんですからね。所で、あんた自身の用事は何うですね？』と彼女は嚴つい樣子をして伯爵に問ひ掛けた。

『何もかもみんな一時に重なつて了ひましてなあ、』と伯爵は答へた。『ぼろ切れも少し買はなくちやなりませんし、莫斯科在の領地と家に買手がついてゐますので、若しお願ひ出來るなら、わたしは何とか繰り合せて、マリンスコエ村へ一日出向きますから、留守の間娘共をあなたに押し附けたいのですがね。』

『よろしい、よろしい、わたしが預つたら大丈夫。わたしの傍にゐれば後見會議も同じ事ですよ。わたしがそれ〴〵行くべき所へ連れて行つて、叱りもすれば可愛がりもします。』大きな手で氣の入りの名付け娘ナターシャの頰に觸り乍ら、アフロシーモヴはかう言つた。

翌朝彼女は二人の令孃をイエールスカヤと、オーベル・シャリメの店へ連れて行つた。シャリメは非常にアフロシーモヴを恐れてゐたので、少しも早く家から追ん出して了ひたいばかりに、いつも損をして衣裳を負けるのであつた。アフロシーモヴは殆ど支度の全部を註文した。歸宅後、彼女はナターシャ以外の者をすつかり追ひ拂つて、氣に入りの少女を肘椅子の傍へ呼び寄せた。

『さあこれから少し話さうね。先づい、お婿さんが出來てお目出度う。全く立派な男を釣り上げたねえ！わたしはお前さんのために喜んでゐます。あの人はこんな年頃から（と彼女は地上二

尺ばかりの邊を指さした）知つてゐるがね。』ナターシャは嬉しさうに顔を赤めた。『わたしはあの人もあの家族もみんな好きです。所でね、よくお聞き。お前さんも知つての通り、老耄れのニコライ公爵が息子の結婚を望まないのです。一徹なお爺さんだからね！それは勿論アンドレイも子供ぢやないから、お父さんの承知が無くたつて事は濟むけれど、無理によその家庭へ入り込むのは宜しくない。成るべく穩便に優しくしなくちやいけない。お前さんは悧巧ものだから巧くおやりだらうね。巧く悧巧に立ち廻るんですよ。そしたら萬事芽出度く納るから。』

ナターシャは默つてゐた。アフロシーモヴは恥しいからだらうと想像したが、併し實際の所、ナターシャは自分とアンドレイの戀物語（ロマンス）に、他人が干渉するのが不快だつたのである。自分達の戀は世間のあらゆる出來事から、まるで懸け離れた特別なもので、到底何人にも理解されないものだ、と彼女は考へてゐたのである。彼女はアンドレイ公爵一人のみを愛して、ほかの者には目もくれない、又アンドレイも彼女を愛してゐて、二三日中には此の地へやつて來て、彼女を連れて行く筈になつてゐる――それ以外彼女は何（なん）にも要らなかつた。

『お前さんも知つてでせうが、わたしはずつと以前からあの人を知つてゐるし、マーシェンカ――お前さんの小姑も好きなんですよ。小姑は鬼千疋といふけれど、どうしてあの娘（こ）ばかりは蟲も殺しやしない。それがわたしに向いて、是非お前さんを連れて來てくれつて賴んだのです。だ

からお前さん、明日一つお父さんと一緒にマーシャを訪ねて、上手に甘えておいで。お前さんはあちらより年下なんだからね。やがてその中にあの人が歸つて來ると、もうお前さんは妹ともお父さんとも知合になつて、而も可愛がられてゐるといふ段取でせう。さうぢやないかえ？全く何より都合がいゝぢやないか？』

『いゝわ。』ナターシャは澁々かう答へた。

七

次の日マリヤ・ドミートリエヴナの勸めに從つて、イリヤー伯爵はナターシャを連れて、ボルコンスキイ公爵訪問に出掛けた。伯爵は浮かぬ氣持でこの訪問の支度をした。彼は心中恐しかつたのである。民兵募集の當時、老公爵に面會して晩餐に招待したとき、その答へとして兵員不足に對する烈しい譴責を聞かされた。この最後の記憶がイリヤー伯爵の心中に深く刻まれて居た。それに反して、ナターシャは自分の一帳羅の着物に着換へて、非常に浮々した氣分になつてゐた。「向うの人がわたしを愛しないなんて、そんな法があるもんぢやない。」と彼女は考へた。「わたしはいつでも皆に可愛がられて來たんだもの。それにわたしも向うの人達の望む事は、何でもして上げる積りだわ。お爺さんはあの人のお父さんだといふ事のために、令孃はあの人の妹さんだといふ

事のために、わたし悦んで愛して上げるつもりだ。何うしてもわたしを愛さずにゐられない程、あの人達を愛して上げるわ！」

親子はヲズドギーゼンカなる古い陰氣な家に車を寄せて、玄關へ入つて行つた。

『あゝ神よ、祝福を與へ給へ。』伯爵は半ば冗談に半ば眞面目にかう言つた。けれどナターシャは父が控室へ入る時、ひどくあわてゝ、臆病げな低い聲で、公爵と令孃はご在宅ですか、と訊ねたのに氣が附いた。

彼等の來訪を取り次いだ後、召使共の間にごた〳〵が起つた。二人の訪問を取次ぎに驅け出した侍僕は、廣間で今一人の侍僕に押し止められた。そして二人で何やら小聲に囁き合つてゐた。やがて廣間へ一人の小間使が驅け込んで、何やら令孃のことを言ひ乍ら、同じく急き込んだ調子で話した。遂に一人の怒りつぽい樣子をした老僕が、ロストフ親子の方へやつて來て、老公爵は面會する事が出來ないが、令孃が居間へ招じる由を告げた。

最初に客を迎へたのはブリエンヌであつた。彼女はことさら恭しく親子を迎へて、令孃の許へ案内した。マリヤは昂奮して慴えたやうな顏に、赤い汚點（しみ）を一ぱい浮べ乍ら、重々しく足を鳴らしつゝ、客を迎へに驅け出した。彼女はゆつたりした、愛想のいゝ樣子を作らうと空しく努力した。彼女は一目してナターシャが氣に食はなかつた。マリヤの目から見ると、彼女はあまり華美（はで）

で、輕輕しいほど陽氣で、そして虛榮心の熾な女のやうに思はれた。マリヤは未來の嫂を見ぬ前から、其の美貌や青春や幸福に對する羨望と、兄の戀に對する嫉妬のため、彼女に對して不利な心持を抱いてゐる事を、自分でも知らなかつたのである。この抑へ難い反感の他に、この瞬間マリヤの昂奮してゐる譯が今一つあつた。それは老公爵がロストフ親子來訪の取次を聞くと、そんなものに用はない、若しマリヤが面會したいといふなら勝手だが、決して俺の所へ通す事はならんと呶鳴つたからである。マリヤは面會の決心をしたけれど、今にも父が突拍子もない事を仕出來しはせぬかとびく〳〵してゐた。何故といつて、老公爵はロストフ親子の來訪を聞いて、大分逆上したらしい風だつたからである。

『いや、お孃さま、到頭家の唱歌氣ちがひを連れて參りました。』恭しく足摺りし乍ら、若しや老公爵がやつて來はせぬかと心配するやうに、不安げに邊りを見廻しつゝ、伯爵はかう言つた。『お近附が願へまして寔に嬉しうございます……公爵は未だ加減がお勝れになりませんさうで、實に〳〵殘念に存じます。』彼はなほ暫く紋切型の挨拶を並べた後立ち上つた。『お孃さま、まことに申し兼ねますが、此のナターシャをほんの十五分ばかり、あなたにお預け出來ませんでせうか。わたしは一寸一足其處まで——犬廣場（ソバーチヤヅシロチヤードカ）のアンナ・セミョーノヴナの所まで行つて來たいのですが……え、直ぐ連れに參ります。』

伯爵がこの狡猾な外交手段を考へついたのは、未來の小姑に自分の嫂と胸中を語り合ふ暇を與へるためと(彼は後で娘にさう話した)、今一つは兼々恐れてゐる、老公爵との出會を避けるためであつた。彼は娘にそんな事を言はなかつたけれど、ナターシャは父の恐怖と不安を悟つて、侮辱されたやうに感じた。彼女は父のために顔を赤くした。が、未だそれよりも、自分が顔を赤くしたのに一層腹を立てて、わたしは誰も恐かありませんと言ひたさうな、大膽な挑むやうな目附でマリヤを眺めた。マリヤは伯爵に向つてそれは大變嬉しい事だ、どうぞなるべく長くアンナさんの所に居て下さいと言つた。で、伯爵は立ち去つた。

マリヤがさし向ひでナターシャと話したいと思つて、しきりに不安げな視線を投げ懸けるにも拘はらず、ブリエンヌは部屋を出て行かうとしないで、莫斯科の遊樂や芝居の話をいつ迄も續けるのであつた。ナターシャは控室で起つたごた〳〵や、父の不安げな態度や、令孃の不自然な調子などで侮辱を感じた。マリヤが自分達に會つたのも、特別のお慈悲のやうに思はれた。それ故、すべてが彼女に取つて不快であつた。マリヤは彼女の氣に入らなかつた。何だか恐しく不縹緻で、わざとらしい乾き切つた女のやうに思はれた。ナターシャは突然心の毛を逆立てたやうな風になつて、我れともなしに氣のない調子で話し始めた。それが一層マリヤとナターシャの距離を大きくしたのである。わざとらしい苦しい五分間の會話の後、次第に近附いて來る足早な上靴の音が

聞えた。マリヤの顔は恐怖の色を表した。部屋の戸があいて、白い室内帽に寛衣(ガウン)を着た老公爵が入つて來た。

『あゝお孃さん。』と彼は言ひ出した。『お孃さん、伯爵令孃……ロストフ伯爵家の御令孃——だつたと思ひますが……いや、全く御免下さい、平に御容赦を……御來訪の榮を賜つた事を知らなかつたものですから(神樣も照覽あれ、實際知らなかつたのです)、一寸娘の所へと思つて、こんな着物を着た儘で失禮しました。どうぞお赦しを……神樣も照覽あれ、全く知らなかつたのですから。』神樣といふ言葉に力を入れ乍ら、不自然な不快な調子で彼は繰り返した。マリヤは目を伏せたまゝ、父の顔もナターシャの顔も見上げる氣力さへなく、茫然と突つ立つてゐた。

ナターシャは一寸立ち上つてまた座についたが、矢張りどうしていゝか分らなかつた。只ブリエンヌのみは氣持よくほゝ笑んでゐた。

『どうぞお赦しを、どうぞお赦しを！神樣も照覽あれ、ちつとも知らなかつたもんですから。』と老人は呟くやうに言つて、ナターシャを頭の頂邊(てつぺん)から足の爪先まで、じろ〳〵見廻した後ぷいと出て行つた。

老公爵の去つた後、ブリエンヌが第一番に話題を發見して、老公爵の健康の勝れない事を話し始めた。ナターシャとマリヤは無言で互に睨みあつてゐた。二人が言ふべき事を言はないで、無

言に眺めて居れば居る程、對手を快からず思ふ念が益々募つて來た。

伯爵が歸つて來たとき、ナターシャは遠慮もなく悅しさうな樣子を見せて、歸りを急ぎはじめた。彼女はこの瞬間、自分をこんなばつの惡い立場に立たせて、アンドレイ公爵の事を一口も言はずに、苦しい三十分を過さした、此の乾き切つた老孃を殆ど憎らしく思つた。「だつて此の佛蘭西女のゐる前で、わたしの方から先に、あの人の事を言ひ出せないぢやないの。」とナターシャは考へた。

マリヤもその間同じ考へに苦しんで居た。ナターシャに言はなければならないのを知りつゝ、彼女はどうしてもそれが出來なかつた。それはブリエンヌの邪魔もあつたが、この緣談の話を始めるのが何うしてこんなに苦しいか、彼女自身にも分らなかつたからである。伯爵がもう部屋を出たとき、マリヤは急ぎ足でナターシャに近附いた。そして其の手を取つて、重い溜息をつきながらかう言つた。

『待つて下さい、わたし一寸……』

ナターシャは何に向けられたとも分らない冷笑を浮べ乍ら、マリヤの顏を眺めた。

『ナタリイ、』とマリヤは言ひ出した。『わたしはねえ、兄がかういふ幸福を發見したのを、嬉しく思つてゐるのでございますよ……』

彼女は嘘を言つたなと感じたので言葉を止めた。ナターシャはこれに氣がついて、その原因を察した。

『わたし今そんなお話するのは工合が惡いと思ひますわ。』ナターシャは表面に品格と、冷靜を粧ひ乍らかう言つたが、咽喉元には涙のせぐり來るのを感じた。

「わたしは何を言つたんだらう、わたしは何をしたんだらう！」部屋を出るや否や、彼女はかう考へた。

此の日アフロシーモヴの家では、ナターシャが食事へ出て來るのを、みんな長いあひだ待つてゐた。彼女は居間に坐つた儘、幾度も鼻をかみ乍ら、子供のやうにしやくり上げて泣いてゐたのである。ソーニャは其の上へ屈み込んで髮に接吻してゐた。

『ナターシャ、あんた何を泣いてるの？』と彼女は言つた。『あんな人達に構ふ事はなくつてよ！何もかも無事に濟んで了ふわ、ナターシャ。』

『だつて、わたしどんなに口惜しかつたか、あんたにや到底も分らないでせう——まるでわたしが……』

『もう何も仰しやんなよ、ナターシャ。何もあんたが惡かないわ、だからちつとも苦にする事なんかなくつてよ！さ、わたしを接吻して頂戴。』とソーニャは言つた。

ナターシャは首を擡げて、友の唇に接吻すると、濡れた顔を對手に押し附けた。
『わたし何にも言へないわ、分らないんですもの。誰も惡かない。』とナターシャは言つた。『わたしが惡いのよ。だけどこんな事全く恐しい、あゝ、なぜあの人は歸つて來ないんでせう？』
彼女は目を赤くして食事へ出て來た。マリヤ・ドミートリエヴナは、ロストフ親子が老公爵から何んな待遇を受けたか知つてゐたので、ナターシャの沈んだ顔に氣の附かないやうな風をして、食事の間ぢうしつかりした大きな聲で、伯爵やその他の客に冗談口を利いた。

八

此の晩ロストフ一家は、アフロシーモヴが手に入れてくれた切符で歌劇へ出掛けた。
ナターシャは行きたくなかつたのだが、特に自分一人のために計つて呉れるマリヤ・ドミートリエヴナの親切を、むげに斷る譯に行かなかつた。彼女は着換をしてから、父を待ちながら廣間へ出た。そして大きな姿見を覗いて見て、自分の美しさ——竝々ならぬ美しさを感じると、彼女は一層物寂しくなつた。併し寂しくはあるが、また甘いやうな戀心も交つてゐた。
「あゝ、若しあの人が其處に居たら、わたし以前とはまるで別なものになつて了ふ。何か譯の分らない馬鹿々々しい臆病な心地をさらりと棄てゝ、まるで新奇にざつくばらんにあの人に抱き

附いて、ぴつたり體を押し附けて、以前あの人がよくわたしを見たやうな、探すやうな物珍しさうな目附で、わたしを見させて上げるんだけど。それからあの時分と同じやうな笑ひ方をさせて上げるんだけど。あゝあの目、まるであの目が今見えるやうな氣がする？」とナターシャは考へた。「あの人のお父さんや妹などに何の用があるものか。わたしあの人が好きだ、あの人一人が好きなばかりだ——あの顔、あの目、男らしいけれど又子供らしい笑ひ方……いや〳〵、あの人の事を思はない方がいゝ。思はないで忘れよう、當分の間すつかり忘れよう。わたしこんな待遠しさはとても我慢出來ない、今にも直ぐ泣き出しさうだわ。」彼女は泣くまいと努力しながら、鏡の傍を離れた。「それにしても何うしてソーニャはあゝ靜かに、なだらかにニコーレンカを愛する事が出來るものかしら。そしてあゝ長い間辛抱强く待つてゐられるのかしら？」同じく着換を濟ませ、扇を手にして出て來るソーニャを眺めながら、彼女はかう考へた。「いや、あの女はまるつ切り別な人なんだ。わたしにや到底も出來ない！」
ナターシャは此の瞬間、自分の心が恐しく感傷的に和らいで、愛し愛されてゐると言ふだけで、物足りないやうに感じられた。彼女は今すぐ戀しい人を抱いて、自分の心を充してゐる愛の言葉を語りもし、また對手の口からも聞きたかつたのである。父と竝んで馬車の中に坐つた儘、凍つた窓にちら〳〵する街燈の灯を、物思はしげに眺めてゐるうち、彼女は一層人戀しく淋しい氣持

になつた。そして誰と一緒に何處へ行つてるといふ事も、すつかり忘れて了つた。長い馬車の列に入つて、雪の上を靜かに轍を軋ませながら、ロストフの馬車は劇場へ着いた。ナターシャとソーニャとは、服の裾を抓み乍ら急がしげに立ち上つた。伯爵も侍僕等に扶けられつゝ外へ出た。入つてゆく貴婦人や、紳士や、番附賣りなどの間を分けて、三人は特等席の廊下へ進んで行つた。閉め切つた戸の陰からは、もう奏樂の響きが聞えた。

『Natalie, vos cheveux (ナターリイ、あんたの髪が……)』とソーニャは囁いた。

觀客掛りが恭しく急がしげに令孃達の前を辷り拔けて、棧敷の戸を開けた。奏樂は一際はつきりと聞え始めた。そして戸の向うには、貴婦人のあらはな肩や手に充された明るい棧敷の列と、制服に輝く騷々しい土間がぱつと眼を射た。隣の棧敷に入つた婦人は、女らしい嫉妬に輝く目でナターシャを見た。幕は未だ上らないで、開幕樂(ウヱルチユール)を演奏してゐる所であつた。ナターシャは服を正しつゝ、ソーニャと一緒にずつと通つて、灯火華やかな向う棧敷のつらなりを見廻し乍ら座に着いた。長い間忘れて居た感覺――數百の目が自分の露(あら)はな手や頸を見てゐるといふ感覺が、不意に快く(と同時にまた不愉快に)彼女の全身を領した。そして此の感覺に相當する無數の記憶や、希望や、興奮が、心の中に目醒めるのであつた。

ナターシャとソーニャといふ二人の目立つて美しい令孃と、大分以前から莫斯科に姿を見せなかつたイリヤー伯爵とは、一同の注意を惹くに十分であつた。それにアンドレイ公爵とナターシャとの間に約束がある事も、又その時以來ロストフ一家が田舍に引つ込んだ事も、薄々知れ渡つてゐるので、露西亞全國で指折りの花婿を我物とした娘を、人々は好奇の目を以て眺めた。

ナターシャは田舍へ籠つてゐる中に一層美しくなつた、とかう人々は言つて居たが、此の晩は心持が昂奮してゐるために殊に美しかつた。生と美に張り切つた彼女の姿は、周圍に對する無關心な表情と一緒になつて、人々の目を射た。その黑い目は誰を求めるでもなく群集を眺めてゐた。そして肘から上を露はした華奢な手を、天鵞絨張りの手摺へもたせた儘、無意識に音樂の拍子と合せ乍ら、番附を丸め込んで握つたり緩めたりしてゐた。

『御覽なさい、あすこにアレーニナさんが。』とソーニャは言つた。『お母さんと一緒らしいわ！』

『おや〳〵！ミハイル・キリールイチが又肥りなすつた。』と老伯爵は言つた。

『あらまあ！ドルベツカーヤさんが素的な帽子を冠つて！』

『カラーギナさん親子が――ボリースもジューリイと一緒に。そつくり花嫁花婿といふ恰好だなあ。ボリースは申込をしたのかしらん？』

『勿論ですとも、わたしも今日聞いたんですがね。』ロストフ一家の棧敷へ入つて來たシンシンがかう言つた。

ナターシャは父の見てゐる方角を眼めた。すると肥つた赤い頸に(それには白粉のうんと附いてゐる事を、ナターシャは知つてゐた)眞珠の鎖をつけ、さも幸福らしく母と竝んでゐるジューリィの姿が目に入つた。その後ろには滑らかに撫で付けられた、ボリースの美しい頭が見えた。彼は微笑を含みつゝ、ジュリーイの口へ耳を突き付けてゐた。彼は額越しにロストフ家の人々を見遣つて、笑みを浮べつゝ何やらジューリイに言つた。

「あの人は屹度わたし達の事を言つてるのだ、わたしとあの人の事を言つてるに相違ない。」とナターシャは考へた。「そして花嫁さんがわたしのことを燒くものだから、一生懸命宥めてるに相違ない。御苦勞樣ねえ、つまらない心配をして！わたしなんかあんな人達にちつとも用はありやしないわ。一寸知らせて上げたい位だ。」

その後ろには綠色の帽子を冠つたドルベッカーヤ夫人が、何事も神樣のお心に任せました云ふやうな、仕合せな暢氣らしい顏附をして坐つてゐた。彼等の棧敷にはナターシャの既に經驗して大好きな、花嫁花婿の雰圍氣が漂つてゐる。彼女は顏を反けた。と、今朝の訪問で口惜しかつた事の數々が、急に彼女の記憶に甦つた。

「あのお爺さんはどんな權利があつて、わたしを家族の中へ入れまいとするんだらう？あゝ、こんな事は思はない方がいゝ、あの人の歸るまで思はない方がいゝ！」と彼女は考へて、土間に

坐つてゐる知つた顏や、知らない顏を見廻し始めた。土間の前列の眞中にはドーロホフが、舞臺べりに脊を靠せ乍ら立つてゐた。うねりを打つた髮を大きく上へかき上げて、波斯風の着物をつけてゐる。彼は自分が小屋ぢうの注意を一身に集めてゐる事を承知し乍ら、まるで自分の居間にでもゐるやうな自由な態度で、場内でも一番目立つ場所に立つてゐた。其の周りには莫斯科一流の若紳士が、群をなして集つてゐた。明らかに彼はその牛耳を取つてゐるらしかつた。

イリャー伯爵は笑ひながら、顏を赤めてゐるソーニャをつゝついて、以前の崇拜者を指さして見せた。

『分つたかね？』と彼は訊いた。『併し一體何處からやつて來たんだらうなあ。』伯爵はシンシンに向つてかう言つた。『どつかへ身を隱したつて話ぢやないか？』

『身を隱したんですよ。』とシンシンは答へた。『高架索にゐた事もあるが、其處もまた逃げ出して、さる領主を賴つて波斯の大臣にまでなつた。が、此處でも王樣の弟を殺したつて話です。いや、どうも莫斯科の奧さん達はみんな夢中なんですよ！ Dolochoff le Persan(波斯のドーロホフ)といつただけでもうお終ひなんです。今莫斯科では、ドーロホフの名を出さなかつたら、話も出來ないんですからねえ。誓言するにもドーロホフ、何でもかでもドーロホフ、ドーロホフと註文の多い所は、まるで蝶鮫のやうでさあ。』とシンシンは言つた。『ドーロホフとアナトーリ・クラーギン、

此の二人は莫斯科の奥さん達をみんな氣違ひにして了ひましたよ。』

此の時隣り棧敷へ髪を大きく束ねた、脊の高い美人が入つて來た。白い肥えた肩は恐しく剝き出されて、首には大粒な眞珠が二重に竝んでゐる。婦人は太地の絹服をさや〳〵鳴らし乍ら、長いこと掛つてやつと腰を下した。

ナターシャは思はず其の肩や、頸や、眞珠や、束髪を見詰め乍ら、肩と眞珠の美しさに見惚れた。ナターシャが再び彼女に見入つた時、婦人は此方を振り向いた。そしてイリヤー伯爵と視線が會ふと、彼女は一寸點頭いて微笑した。それはピエールの妻ベズーホヴ伯爵夫人であつた。社交界の人を殘りなく知つてゐたイリヤー伯爵は、屈み込んで話し掛けた。

『もう前から此方へお越しでございましたか？』と彼は言ひ出した。『え、參りますとも、參りますとも、是非お手に接吻させて頂きます。わたしは一寸用事が有りまして、娘達を連れて參りました。セメョーノヴの藝は素敵ださうでございますね。』とイリヤー伯爵は言つた。『ピョートル・キリーロヴィッチ（ピエール）伯爵は、一度もわたし共をお忘れになつた事がございません。今此方にゐらつしやいますか？』

『はあ、主人もお訪ねしたいと申して居ました。』と言つて、エレンは注意深くナターシャを眺めた。

イリヤー伯爵は再び自分の席に着いた。

『美人だらう？』と彼はナターシャに囁いた。

『奇蹟だわ！』とナターシャは言つた。『あゝ、いふ人になら夢中になるほど戀が出來てよ！』

この時開幕樂の最後の音が響いて、指揮長の棒がこつ〳〵と鳴つた。土間では遲刻した男連が自席へ進んで行つた。やがて幕が上つた。

幕が上るや否や、土間も棧敷もすつかり靜まり返つた。そして男も（年取つたのも若いのも、制服を着たのも燕尾服を着たのも）あらはな體に寶石を鏤めた女も、みんな貪るやうな好奇心を以て、自分の注意力を悉く舞臺の方へ注いだ。ナターシャも同樣見物し始めた。

九

舞臺には眞中に平らな板が敷いてあつて、兩側には木立を描いたけば〳〵しい背景が立つてゐる。後ろには布が板の上に引つ張つてあつた。舞臺の眞中には、赤い胴衣に白い袴をつけた娘達が坐つてゐた。たゞ一人恐しく肥つた白い絹服の娘が群を離れて、後ろに綠色の板紙を貼り附けた、低いベンチに腰をかけてゐる。娘等は打ち揃つて何やら唱つた。合唱が濟むと、白衣の娘は後見人の口に近寄つた。すると絹の窄袴を肥えた足にぴつたりとはいて、羽毛の附いた帽子を被

り、匕首を持つた一人の男が、其の傍へ近寄つて、兩手を擴げ乍ら唱ひ出した。

きつちりした窄袴をはいた男が一人で唱ひ終ると、續いて白衣の娘が唱つた。それから二人が暫く默つてゐると、管絃樂が聞え始めた。男は白衣の娘の手を指でまさぐり出した。それは明らかに娘と一緒に合唱を始めるため、一定の拍子を待ち設けてゐるらしかつた。二人が一緒に唱ひ終ると、場内の人は一齊に拍手したり喚いたりし出した。すると相愛の戀人に扮する男と女は、兩手を擴げてほゝ笑み乍ら會釋し始めた。

永く田舍にゐて、眞面目な心もちになつてゐたので、ナターシャはこれらの事が粗野で奇怪に感じられた。彼女は歌劇の筋を辿る事も、音樂を聞く事も出來なかつた。彼女は唯けば〳〵しく彩つた板紙や、明るい光の中で奇妙な身振をしたり、物を言つたり、唱つたりしてゐる、不思議な服裝の男や女を見たばかりである。これが何を現さうとしてゐるかは、彼女も承知して居たが、併しあまりにわざとらしく仰山で不自然なので、彼女は時に役者が氣の毒になつたり、時に滑稽に思はれたりした。彼女は自分の感じてゐる冷笑と怪訝の念を、他の見物の顏にも發見しようと思つて邊りを見廻した。併しどの顏もどの顏も、舞臺で行はれる事を一心に注視して、わざとらしい（とナターシャには感じられた）歡喜の色を現してゐた。

「屹度、あゝしなくちやならないのだらう！」とナターシャは考へた。彼女は土間に並んでゐる、油でてかゝ光る男連の頭と、棧敷にゐる裸の貴婦人連——殊に隣に坐つてゐるエレンを、交るゞ〳〵眺めてゐた。エレンは殆ど眞裸と言つてもい、位な恰好で、靜かに穩かな微笑を浮べた儘、人いきれで暖められた空氣と、場内に漲る明るい光線を肌に感じ乍ら、目を放さずに舞臺を見詰めてゐた。次第にナターシャは長い間經驗しなかつた、陶醉の狀態に陷り始めた。彼女は自分が何者かと云ふ事も、自分が何處にゐるかといふ事も、また自分の前で何が行はれてゐるかといふ事も、すつかり忘れて了つた。彼女は前を見乍らぼんやり考へるだけであつた。思ひ切つて奇妙な想念が、突然頭の中を何の聯絡も無くちらつき始めた。どうかすると脚光の所へ飛び上つて、今の女優の歌つた咏嘆調を歌はうかといふ考が浮んで來たり、自分の傍近く坐つてゐる老人に扇で觸つて見たくなつたり、エレンの方へ屈み掛つて擽つてやりたくなつたりした。

咏嘆調の始りを待ち設けて、舞臺がしんとなつた瞬間に、ロストフ一家の棧敷と同じ側に沿うた土間の戸がきいと軋んで、遲れて來た男の足音が響いた。「あ、あれだ——クラーギンだ！」とシンシンが囁いた。ベズーホヴ伯爵夫人は入り來る男にほゝ笑み掛けながら、くるりと後ろを振り向いた。ナターシャはエレンの視線の向いてゐる方を見た。と、思ひ上つたやうな、それと同時に慇懃な樣子をして、自分等の棧敷へ近寄つて來る、並々ならず美しい一人の副官が目に入つた。それは以前から彼得堡の舞踏會で出合つて目に止つてゐた、アナトーリ・クラーギンである。今彼

は片方に肩章、片方に綬のついた副官服を着て、控目な氣取つた足取りで歩いた。若し彼がこれ程好男子でなくつて、美しい顔に人の好さゝうな滿足と愉悅の表情がなかつたら、その足取りは寧ろ滑稽なものとなつたかも知れない。舞臺の所作はどん〳〵進行してゐるにも拘らず、彼は微かに拍車と軍刀を鳴らしつゝ、格別急がうともせずに、香水のぷん〳〵匂ふ美しい頭をすうつすうつと高く運びながら、廊下の絨氈を踏んで行つた。ナターシャの方へ一寸一瞥を與へて妹に近寄ると、艶々した手袋の箝つた手を棧敷の端へ掛けた。そして輕く點頭き乍ら前へ屈み込んで、ナターシャを指さしつゝ、何やら妹に訊ねた。

『Mais charmante (實に可愛い!)』と彼は言つた。ナターシャは其の聲を聞いたといふよりも、寧ろ脣の動き方を見て、自分の事を言つたのだと悟つた。それから彼は第一列へ進んで行つて、ドーロホフの傍へ腰を掛けた。他の者が御機嫌を取るやうに應對してゐるドーロホフを、彼は隔てなさゝうに平氣で肘でつゝついた。そして愉快さうに目をぱちりとさせて、ドーロホフに笑ひ掛けながら、舞臺端に片足突つ張つた。

『兄妹二人よくまあ似たもんだなあ!』と伯爵が言つた。『そしてどちらも縹緻のいゝ事は!』

シンシンは低い聲で、莫斯科に於けるアナトーリの奸策事件を、伯爵に話して聞かせ始めた。ナターシャはそれに耳を傾けた。それはたゞ彼が自分の事を Charmante と言つたからである。

序幕は終つた。土間の連中はみんな立ち上つて入り亂れながら、歩き廻つたり出て行つたりし始めた。

ボリースがロストフ一家の棧敷へやつて來た。あつさり人々の祝詞を受けた後、眉を吊り上げてぼんやりした微笑を浮べ乍ら、ナターシャとソーニャに向つて、結婚式に列して貰ひたいと云ふ、ジューリイの頼みを傳へて出て行つた。ナターシャは浮き〳〵した媚めかしいほゝ笑みを浮べ乍ら、彼を對手にいろ〳〵の話をして、以前自分が戀してゐたボリースの結婚を祝した。今彼女の陷つてゐる陶醉の心持では、一切が單純で自然に見えたのである。

裸のエレンは彼女の傍に坐つて、すべての人に向つて、一樣にほゝ笑み掛けてゐた。で、ナターシャもそれと寸分違はぬ笑みをボリースに與へた。

エレンの棧敷は土間の方から來た第一流の名士や、聰明の噂高い人達で一杯に取り卷かれた。彼等は自分がエレンと知合だといふ事を、爭つて皆にひけらかさうとしてゐるらしかつた。

クラーギンはこの幕間のあひだぢう、ドーロホフと共に舞臺端に立つて、ロストフ一家の方を眺めてゐた。ナターシャは彼が自分の事を話してゐるのが分つた。それが彼女に滿足を與へた。彼女は自分の横顔——それは彼女の考へに依ると最も有利な位置であつた——が彼によく見えるやうに向きまで變へた。二幕目の始る前、ピエールの姿が土間に現れた。ロストフ一家は今度の上京

以來、未だ一度も彼に會はなかつた。彼は沈んだ顔付をしてゐた。そしてナターシャが最後に會つた時から見ると、また一層肥えて來た。彼は誰にも目を留めないで、ずつと第一列へ進んで行つた。アナトーリは其の傍へ近寄つて、ロストフ一家の棧敷に目を配つたり指さしたりし乍ら、何やらしきりに話し始めた。ピエールはナターシャを見ると、急に元氣附いて椅子の間を縫ひながら、急がしげに彼等の棧敷をさしてやつて來た。傍へ近寄ると、彼は頰杖ついてにこ〳〵し乍ら、長い間ナターシャと話しをした。ナターシャはピエールと話してゐる間に、ベズーホヴ伯爵夫人の棧敷で男の聲がするのを聞き附けた。そして何故かそれがアナトーリだといふ事を知つた。彼女は振り返つた。と、二人の目がぴつたり出合つた。彼は殆ど微笑しないばかりの顔附で、憧れ渡つたやうな優しい目附をして、まともに彼女の目を見詰めた。其の目を見てゐると、かうして傍近く坐つて其の顔を眺め、おまけに自分は對手の氣に入つてゐると固く信じ乍ら、その人と知り合ひでないのが、不思議に思はれる位であつた。

二幕目では記念碑を描いた背景があつて、布の上には月をかたどる穴があいてゐた。そして脚光（フートライト）の蓋が上げられた。喇叭とコントラバスが低音で何やら奏し始めると、左右から黑いマントを着た人が、大勢ぞろ〳〵出て手を振り始めた。手の中には何やら匕首やうのものがあつた。やがて又誰か別な人達が馳け出して、元は白衣（びやくえ）、今は水色衣（ぎぬ）の娘を引つ立てゝ行かうとする。併し彼等

は直ぐに連れて行かないで、長いこと娘と一緒に唱つた。やつと連れて行つて了ふと、道具裏で三度ばかり、何か金屬性のものを叩く音がした。すると一同は跪いて祈禱の文句を唱ひ始めた。この動作は看客の熱狂的な叫びのために幾度か遮られた。

此の幕の間、ナターシャは土間の方へ視線を向ける度に、椅子の脊から外へ手をだらりと投げ出したまゝ、自分を眺めてゐるアナトーリが目に入つた。あの人はすつかり自分の擒になつてゐる、と思ふと彼女は氣持が好かつた。そしてこの中に何か悪い事があらうとは、思ひも初めなかつた。

二幕目が終つた時エレンは立ち上つて、ロストフ一家の棧敷を振り向いた（彼女の胸はすつかり露（あら）き出されてゐた）。そして手袋のはまつた指で老伯爵をさし招き、自分の棧敷へ入つて來る人々に目もくれないで、愛想よくほゝ笑みながら話し掛けた。

『ねえ、お宅の美しいお孃さん達を、わたしに紹介して下さいませんか。』と彼女は言つた。『町中お二人の事で大騒ぎしてゐますのに、わたしは未だお近附でないんですもの。』

ナターシャは立ち上つて、光まばゆき伯爵夫人の傍へ席を占めた。ナターシャは此の美しい貴婦人の讃辭が嬉しくて、滿足の餘り眞赤な顔をした。

『わたしも今度から、莫斯科の人になりたいと思つてゐますの。』とエレンは言つた。『本當にあなたはこんな眞珠のやうな方を田舍へ埋めて、よくまあ氣が咎めない事ですねえ！』

ベズーホヴ伯爵夫人は、魅力ある婦人といふ評判を取つてゐたが、それは決して間違つてゐなかつた。彼女は心にもない事を言ふのが巧くつて、殊に淡泊な自然な調子で、お世辭を言ふのに長けてゐた。

『まあ伯爵、さう仰しやらないで、わたしにお孃さん方の對手をさせて下さいましよ。わたし今度はほんの一寸の積りで此方へ參りましたの、あなたもさうでございませう？ですから、わたし一生懸命お孃さん方に面白い目をおさせしますわ。わたしはね、未だ彼得堡にゐる頃から、あなたの事をいろいろ伺ひましたので、是非お近附に願ひたいと存じてゐましたの。』彼女は持前の單調な美しい微笑を浮べつゝ、ナターシャに向つてかう言つた。『わたしあなたの事を、わたしの小姓（パージ）のドルベツコーイからも伺ひました。お聞きなさいまして、あの人は結婚なさるんですのよ。それから主人のお友達のボルコンスキイ――アンドレイ・ボルコンスキイ公爵からもね。』妙に此の言葉に力を入れて彼女はかう言つた。それで以て、わたしは二人の關係を知つてゐますよ、といふ意を仄めかしたのだ。彼女はもつとよく近附きになりたいから、芝居のはねるまで二人の令孃の中どちらかを、自分の棧敷に道いてくれと賴んだ。で、ナターシャが其方へ行つた。

三幕目の舞臺は宮殿を現してゐた。無數の蠟燭が燃えて、髯武者を描いた畫像が掛け連らねてあつた。中央には王と后（きさき）らしいのが立つてゐた。王は右の手を振りながら、臆氣（おくび）ついたらしく拙

い調子で何やら唱つてから、緋の玉座に坐つた。最初白衣、後に水色衣（ざい）を着てゐた娘は、今下着一枚で髪を振りさばいたまゝ、玉座の傍に立つてゐる。彼女は后に向つて何やら悲しさうに唱つた。けれど王が嚴めしく手を一振りすると、足をむき出した男や女が兩側から出て來て、みんなで一緒に踊り始めた。やがてヴィオリンが細い陽氣な音を立て始めると、太い足をむき出して痩せた手をした娘の一人が、群を離れて道具裏へ入り、胴衣（コルサージ）を正して更に舞臺の眞中へ出た。そして躍り上り樣敏活に足と足とを打ち合はせ始めた。土間の連中は拍手してブラーヴォを叫んだ。

その後から一人の男が片隅に立つた。樂隊席では鐃鈸（ねうはち）と喇叭の音が、一しほ高く響き出した。すると、此の足をむき出した男は恐しく高く飛び上つて、兩足を目まぐるしく交叉し始めるのであつた（これは此の技術のために、年俸六萬留貫（ルーブリ）つてゐるヂュポールであつた）。土間でも棧敷でも二階でも力限り拍手して叫び出した。ヂュポールは急に立ち止つて、ほゝ笑み乍ら四方へ會釋した。後でまた足をむき出した男や女が踊つた。それから王の一人が奏樂に合せて何やら呶鳴り出したが、やがて一齊に合唱し始めた。

併し不意に嵐が起つた。管絃樂（オーケストラ）の方から半音階と第七音（セプチマ）を縮めた諧音とが聞えて來た。人々は驅け出して、其の場に居合はす一人の者を、また道具裏へ引つ立て、行つた。かうして幕が下りた。再び看客の間に恐しい騷音と拍手の音が起つて、人々は夢中になつたやうな顏附で、『ヂュポ

ール！ ヂュポール！ ヂュポール！』と叫び出した。ナターシャはもうそれを奇妙に思はなかつた。彼女は滿足の色を浮べて、嬉しさうに自分の周圍を見廻した。

『N'est ce pas qu'il est admirable—Duport（ねえ、ヂュポールは全くよごさんすわね？）』エレンは彼女に向つてかう言つた。

『Oh, oui（えゝ、本當にね。）』とナターシャは答へた。

一〇

暮間になると、エレンの棧敷へさつと寒氣が流れ込んで戸が開いた。そして傍の人に觸らぬやうに氣を附け乍ら、アナトーリが身を屈めて入つて來た。

『一寸わたしの兄を御紹介さして頂きます。』ナターシャからアナトーリへと、不安げに視線を走らせながらエレンがかう言つた。

ナターシャは自分の美しい顏を、露はな肩越しに、この好男子の方へ向けてほゝ笑んだ。アナトーリは彼女の傍近く座を占めた。彼は傍から見ても、矢張り遠くから見ると同じやうに美しかつた。自分はずつと以前ナルイシキン家の舞踏會以來、お近付きの光榮を願つてゐた。あの時の事は決して忘れない、などと彼は言つた。アナトーリは男連に交つてゐるよりも、女と一座した

時の方が、遙かに氣が利いて淡白であつた。彼は大膽なさばけた口の利き方をした。此の男が兼々話に聞いたやうな恐しい所少はしもなくて、却つてごく無邪氣で、快活で、人のいゝ微笑の持主だと云ふ事は、ナターシャに取つて甚だ奇怪でもあり、同時に快くもあつた。

クラーギンは芝居の印象を訊ねてから、前興行の時セミョーノヴが演技中に倒れた事を、ナターシャに話して聞かすのであつた。

『ねえ、ロストーヴさん、』彼は古くからの知合か何ぞのやうに、突然彼女に向つてかう言ひ出した。『今僕等は假裝の騎馬遊戯（カルセール）を計畫してるんですよ。あなたにも是非加はつて頂きたいんですが。中々愉快なものですよ。みんなカラーギナさんへ集る事になつてるんです。どうぞお出で下さいませんか、ほんとに、ね？』と彼は言つた。

彼はかう言ひながらも、ナターシャの顏や、頸や、あらはな手から、微笑を含んだ目を放さなかつた。ナターシャは彼が自分に隨喜渇仰してゐる、といふ事を少しも疑はなかつた。それは彼女に取つて嬉しかつたけれど、併しアナトーリと同席してゐると、何故か窮屈で息苦しいやうな氣持になつて來た。此方で向うを見てゐない時にも、彼が自分の肩を眺めてゐるのを感じた。そしてもう寧ろ目を見られた方がいゝと思つて、いつしか對手の視線を捕へてゐるのであつた。けれどもさうして彼の目を見詰めてゐる中に、いつも他の男に對して感じる羞恥の垣が、アナトーリ

との間にはもう無くなつてゐるのに氣が附いて、彼女は思はず愕然とするのであつた。彼女は自分でも何故か分らなかつたが、五分の後には、恐しいほど男の心に近附いた事を感じた。時々彼に背中を向ける時など、彼が後ろから自分のあらはな手を摑んで、首筋の邊りへ接吻しはせぬかと、ナターシャは恐しくて堪らなかつた。彼等はごく有觸れた世間話をしたばかりだが、彼女は今まで曾て感じた事のない程、この男の胸に近附いたのを自覺した。ナターシャは一體これはどう云ふ譯かと訊くやうに、エレンと父の方を振り返つた。併しエレンは何處かの將軍と話で夢中になつて、彼女の目附に答へなかつた。また父の目は何時も口癖の「面白いかね。いや、それでわしも滿足だ」といふやうな表情の外、何一つ彼女に語つてくれなかつた。

ばつの惡い沈默が襲うて來ると、アナトーリは少し出張つた目で、まじり〳〵と落ち着き拂つて彼女を眺めた。こんな時に一度ナターシャは沈默を破るため、莫斯科はお氣に召しましたかと訊いた。ナターシャはかう訊くと直ぐ顏を赤くした。彼女はアナトーリと話してゐる間ぢう、絶えず何か無躾な事をしてゐるやうな氣がしてならなかつたのである。アナトーリはそれを勵すかのやうにほゝ笑んだ。

『僕は始めあまり感心しなかつたです。なぜつて、町を快く思はせるのは Ce sont les jolies femmes（美しい婦人ですからねえ。）さうぢやありませんか？ 所が、今はもうすつかり氣に入りました。』意味ありけに彼女を見詰めながら、彼はかう言つた。『騎馬遊戯（カルセール）へいらつしやいますか、あなた？ いらつしやいよ。』彼は對手の花束へ手を伸ばし、聲を低め乍らかう言つた、『Vous serez la plus jolie（あなたはその中でも一番美しいでせう。）いらつしやいよ、ねえナタリヤさん、そしてその言質に此の花を僕に下さいな。』

ナターシャは當のアナトーリと同樣に、彼が何を言つてゐるのか分らなかつた。併しその譯の分らない言葉の中に、無躾な意味が含まれてゐるのを感じた。彼女は何と答へていゝか分らなかつたので、聞かない振をして顏を反けた。が、顏を反けると同時に、ナターシャは彼がつい其處に、すぐ後ろに、自分の傍にゐる事を考へた。

「今どうしてらつしやるか知ら？ 極り惡く思つてらつしやるかしら？ 何とか取り繕つたものかしら？」と彼女は自分に問ひ掛けて見た。併しどうしても振り向いて見ずにはゐられなかつた。彼女はひたと男の目を見詰めた。すると其の位置の近い事や、恃む所ありげな樣子や、人の好さうな優しい微笑などが、遂に彼女を征服したのである。彼女はひたと男の目を見詰め乍ら、對手と同じやうな微笑を浮べた。と、再び自分とアナトーリの間に、もう何の隔てもないといふ事を感じて、彼女は思はずぞつとした。

再び幕が上つた。アナトーリは落ち着き拂つて、愉快げに桟敷を出て行つた。ナターシャは現在の世界にすつかり同化されて父の桟敷へ歸つた。もう目の前に行はれる事が、すべて彼女に取

つて全く自然に見えて來た。けれど其の代り、以前のやうに未來の良人や、小姑や、田舍の生活などを想ふ心は、まるで遠い遠い昔の事のやうに、一度も彼女の頭に浮んで來なかつた。

四幕目では何か惡魔のやうなものが出て來て、いつ迄も〳〵手を振り乍ら唱つてゐたが、到頭足下の板が沈んで下へ落ちて了つた。ナターシャが四幕目の中で目を留めて見たのは、唯これ一つ切りである。何となくそは〳〵して惱ましい氣持であつた。しかも此の原因は、彼女が無意識に目で追ひ廻してゐる、アナトーリ・クラーギンであつた。劇場を出た時、アナトーリは彼等の方へ寄つて來て、馬車を呼び出したり、皆の者を扶け乘せたりした。ナターシャを乘せるとき、彼は肘より少し高い邊をぐつと握りしめた。ナターシャは昂奮して赤くなつた顏を其方へ振り向けた。彼は目を輝かして優しくほゝ笑みながら、じつと彼女を見詰めるのであつた。

家へ歸つて始めて、ナターシャは自分の身に生じた事を、はつきり考へる事が出來た。そして突然アンドレイ公爵のことを想ひ出すと、彼女は思はずはつとした。そして皆のゐる前で(一同は芝居から歸ると茶の卓に向つた)大きな聲で『あゝ、』と叫んで、眞赤な顏をし乍ら部屋を駈け出した。

「あゝ何うしよう! わたしは駄目になつた?」と彼女は獨り言ちた。「どうしてわたしはこんな

になるまで打つ棄つて置いたのだらう?」彼女は眞赤になつた顏を兩手で蔽ひ乍ら、長い間じつと坐つてゐた。そして今日自分の身に起つた事を、明瞭に解剖しようと努めた。併し自分の身に起つた事はさて置いて、自分の感じてゐる事すら了解出來なかつた。彼女には何もかも朦朧として恐しく思はれた。

あの宏大な灯り目眩い劇場の内——金箔のぴか〳〵する短衣を着て、足もあらはなヂュポールが、濕つた板の上を音樂に合して踊り廻ると、令孃も老人も、平然と誇らしげな微笑を浮べた裸のエレンも、有頂天になつて善哉を叫ぶ劇場の内——そこでエレンの陰に坐つてゐる時は、何もかも簡單明瞭であつた。所が自分一人切りになつて見ると、それが急に不可解になつて來たのである。「これは一體どういふ譯だらう? あの人の前で經驗した恐怖は一體何だらう? そして今心に感じる良心の苛責はどうした事であらう?」と彼女は考へた。

ナターシャが夜寢床の中で自分の思つた事を、すつかり打ち明け得る人は、母夫人を措いて外にない。ソーニャは例の堅固で嚴格な見地からして、彼女の告白を聞いてぞつとする程恐しがるか、それとも何一つ分らないで了ふか、何方かである、それはナターシャもよく承知してゐた。ナターシャは自分を惱ます問題を獨力で解決しようと努めた。

「わたしはもうアンドレイ公爵を愛する事が出來なくなつたのかしら?」彼女はかう自問した

が、自ら慰めるやうな薄笑ひを浮べつゝ、答へるのであつた。「まあ、こんな事を訊くなんて、わたし隨分馬鹿だわ！一體わたしにどんな事が起つたんだらう？何にも有りやしないわ。わたしは何にもしやしない、何一つ挑發的な事もしやしない。誰も氣の附く筈はない、それにわたしはもう決してあの人に會はないからいゝ。」と獨り言ちた。「だから何にも起らなかつたつて事は確かだわ。何も後悔する事なんか有りやしない。それにアンドレイ公爵だつて、わたしをこんな女として愛して下さるかも知れない。だけどこんな女とはどんな女だらう？あゝどうしたらよからう、どうしたらよからう！どうしてアンドレイが直ぐ傍に居て下さらないのだらう！」

ナターシャは一寸の間安心したが、すぐ其の後から、又しても或る本能が口を出して、それは全くだ、實際何にも有りやしなかつた、けれどアンドレイ公爵に對する彼女の戀は、以前の純潔さを失つたと囁くのであつた。彼女は再び心の中で、クラーギンとの會話をすつかり繰り返し始めた。そして自分の手を握つたときの、この放膽な美丈夫の額や、身振や、優しい微笑を思ひ浮べて居た。

一一

アナトーリ・クラーギンは莫斯科に住んでゐた。それは父ワシーリイ公爵から彼得堡を追放されたのである。彼が彼得堡にゐると、年二萬ルーブリ以上も現金で使つた上、それと同額の借金まで拵へた。債權者はその借金を皆父公爵に請求するのであつた。

父は息子に向つて、今度だけお前の借金を半額返濟して置く。併しその代り條件がある。外てもない、お前は莫斯科へ行つて、自分がいろ〳〵運動して取つた總指揮官附副官の職務に就き、そこで適當の配偶を見附けなければならぬと宣告して、公爵は彼にマリヤ孃とジューリイを指定した。

アナトーリはこれを承諾して莫斯科へ出掛け、ピエールの許に落ち着いた。ピエールは始めの中、澁々アナトーリを引き受けたが、其の中段々馴れて來て、どうかすると一緒に遊びに行つたり、貸附といふ口實で金をくれてやつたりした。

アナトーリに關するシンシンの評は眞を穿つて居た。彼は莫斯科へ來て以來、すべての莫斯科の夫人連を夢中にして了つた。其の重なる理由は、彼がさうした夫人連を輕蔑して、それより寧ろジプシイの女や、佛蘭西女優などを好んで追ひ廻したからである。その佛蘭西女優の大頭株たるジョルジュ孃は、彼と密接な關係があるとの話であつた。夜はダニーロフなど、いふ莫斯科の浮れ男の催す遊びを、一度も缺かした事がなかつた。仲間でも一番優れた酒豪で、二晩でも三晩でもぶつ通しに飲み續けるし、上流社會の夜會や舞踏會にはいつも姿を見せた。世間では莫斯科の

貴婦人の誰彼と、妙な關係があるやうに噂してゐた。舞踏會などでは、一時に二三人くらゐ女の跡を附け廻して居たが、生娘、殊に概して不縹緻者の多い金持の令孃には、近寄らうとしなかつた。それには今一つの原因がある。極めて親しい友達の他誰も知らない事だが、アナトーリは二年以前もう結婚したのである。

二年前、聯隊が波蘭（ポーランド）に駐屯してゐる時、さして裕福でない土地の地主が、無理矢理にアナトーリを自分の娘と結婚させた。併しアナトーリは間も無く其の妻を捨てゝ了つた。そして若干の金を舅に仕送る約束で、獨身者として押し通す權利を買ひ取つたのである。

アナトーリは常に自分の境遇、自分自身、及び自分以外の者に滿足し切つてゐた。彼は現に自分が生活してゐるより外に生活の仕方はない、自分は今まで少しも惡い事をした事がない、と本能的に眞底から信じて居た。自分の行爲が他人にどういふ影響を及ぼすか、また自分の行爲からどんな結果を生ずるか、かういふ事を彼はまるで考へる事が出來なかつた。丁度鴨が、自分はいつも水の上に住むやうに創（つく）られたものだ、と信じて居るやうに、彼は年收三萬留（ルーブリ）の生活をし、常に社會の優れた位置を占めるべきものとして、神樣から造られたやうに確信してゐた。彼が何處までもさう信じ切つてゐるので、他の者までが彼を見てゐる中にそれを信じるやうになつて、社交界の優れた位置をも金錢をも、彼に拒絶する事が出來なくなるのであつた。實際彼は行き當

りばつたりに誰でも摑まへて金を借り、決してそれを返すといふ事をしないらしかつた。

彼は博奕打でもなかつた。少くとも彼は決して勝を望まなかつた。彼は虛榮心の强い方でもなかつた。人が自分の事を何と思はうと風馬牛であつた。名譽心は未だそれよりも少かつた。彼はよく自分で自分の榮達を打ち毀して父をからかひ、すべて名譽など、いふものを一笑に附してゐた。彼はけちでもなかつたから、人から無心を持ち掛けられて斷つた事がない。ただ一つ彼の好きなのは遊蕩と女であつた。彼の意見に依ると、かうした趣味に何も疾（やま）しい點はなかつた。而も自分の趣味の滿足が他の人にどんな影響を及ぼすか、そんな問題をしんみり考へる事が出來なかつた。それ故、彼は衷心から自分を非の打ち處の無い人間と信じて、誠心誠意卑屈な人間共を輕蔑し、安らかな良心を以て昂然と首を反らしてゐるのであつた。

これ等の『男マグダレーナ』ともいふべき遊蕩兒には、自分の無垢を信ずる潛在感情がある。それは例の「彼女にはすべて許さるべし、何となれば彼女は多く愛したればなり」といふ筆法で、「彼にはすべて許さるべし、何となれば彼は多く樂しみたればなり」といふ赦罪の望みに基づいてゐるのであつた。

追放されて波斯（ペルシヤ）へ渡り、そこで樣々な波瀾を引き起した後、此の年再び莫斯科へ現れて、贅澤な博奕打の生活をしてゐたドーロホフは、古い彼斯堡（ペテルブルグ）時代の仲間なるクラーギンに近附いて、彼

を自分の目的のために利用した。

アナトーリはドーロホフの悧巧で大膽なのを心から愛してゐた。所が、ドーロホフはアナトーリ・クラーギンの名聲や緣戚などが、自分の博奕仲間へ金持の若い人達を誘(おび)き寄せる囮として必要だつたので、對手にそれと感附かせないやうにして、クラーギンを利用し弄んでゐた。彼はかういふ打算に依つてアナトーリを必要としたが、其の外に他人の意志を制御するといふ事それ自身が、ドーロホフに取つては快樂でもあり、習慣でもあり、また要求でもあつた。

ナターシャはクラーギンに強い印象を與へた。芝居のはねた後、夜食の卓で彼は通人らしい態度で、ナターシャの手、肩、足、髪の美點を數へ上げた擧句、彼女の跡を附け廻さうと云ふ決心を打ち明けた。此の跡を附け廻すといふ行爲から、どういふ結果が生ずるか、それはアナトーリの考へ知り得る所でなかつた。いつも自分の行爲がどういふ結果を齎すか、一度も考へた事がないと同じやうに。

『成程美人だ、併し我々に關係はないよ。』とドーロホフが言つた。

『僕は妹にさう言つて、あの娘を食事に招待さしてやるよ。』とアナトーリは言つた。『どうだい?』

『併し君、嫁入するのを待つた方がいゝぜ……』

『君も知つてゐぢやないか、j'adore les petites filles(僕が處女を尊敬するつて事を。)その純潔が今にも失はれようとしてゐんだからね。』

『もう君は一度その petite fille(處女)には酷い目に合つたぢやないか。』アナトーリの結婚を知つてゐるドーロホフはかう言つた。『氣を附けなよ!』

『だつて、もう二度とあんな事は有り得ないからね!え?』アナトーリは人のいゝ、笑ひ方をしながらかう言つた。

一二

芝居の翌日ロストフ一家は何處へも出なかつたし、又誰からも訪問を受けなかつた。マリヤ・ドミートリエヴナはナターシャに隱して、何やらしきりに父と相談してゐた。ナターシャは二人が老公爵の話をして、何やら善後策を講じてゐるのだと察して、不安でもあれば忌々しくもあつた。彼女は今か今かとアンドレイ公爵を待ち焦れて、此の日二度門番をヲボズドギーゼンカへ遣つて樣子を見させた。が、彼は歸つてゐなかつた。彼女は上京當時の二三日よりも、今の方がずつと苦しく思はれた。アンドレイ公爵に對する思慕と焦燥の他に、小姑マリヤと老公爵との會見に關する不快な記憶や、自分でも譯の分らぬ不安や恐怖が加つたのである。公爵がもう永久に歸つて來

ないやうな氣がしたり、時にはまた歸つて來るより前に、自分の身の上に何事か起りさうな氣がしてならなかつた。もう以前のやうにたゞ一人心の中で、靜かに長い間彼を思ひ續ける事が出來なくなつた。彼の事を考へ始めるや否や、老公爵、マリヤ嬢、昨日の芝居、クラーギンなどの記憶が一緒に入り錯つた。自分が惡い事をしてゐるのではないか、あの人に對する貞操はもう傷つけられてるのではあるまいか、かういふ疑問が又しても心に浮んで來る。ふと氣が附いて見ると、又もやあの男の――自分に取つて譯の分らぬ恐しい心持を呼び起したあの男の、言葉、身振、顏面表情の變化の陰影（ニュアンス）など一つ〳〵、細かい點まで追想の絲を捲き返してゐる。家（うち）の人の目から見ると、ナターシャは何時もより元氣がいゝやうに思はれた。併し彼女は決して以前ほど穩かに幸福ではなかつた。

日曜の朝、アフロシーモヴはモギーリツィなるウスペーニエといふ、自分の教會の祈禱式へ客人達を案内した。

『わたしはあゝいふ流行の教會を好きません。』彼女は自分の自由思想を誇らしげな調子でかう言つた。『どこだつて神樣はお一人切りですからね。わたしの方の長老樣は立派なお方で、お勤めも法通りになさるし、實に高尚なものですよ。そして助祭樣も矢張りその通りです。一體唱歌席で音樂會の眞似事をするのが、神聖なことなんでせうか？わたしやいやですね、何の事はない

惡巫山戲ですよ！』

マリヤ・ドミートリエヴナは日曜日が大好きなので、それを巧く樂しむのに長じてゐた。彼女の家は土曜日にすつかり掃除して洗ひ上げられる。日曜日には召使も女主人も仕事をしないで、お祭らしくめかし込んで、一同祈禱式へ出掛けてゆく。主人側の食卓にも料理の數がふやされゝば、召使にも鷲鳥か仔豚の燒肉に火酒が渡る。併し家ぢうのすべての物を通じて、一番祭日らしい感じの現れるものは、マリヤの幅廣な嚴つい顏であつた。この日彼女の顏は何時も決つて物々しい表情を浮べるのであつた。

椅子の蔽ひ布を取り拂つた客間で、祈禱式の後の珈琲を飲んで了つたとき、召使はマリヤに馬車の用意が出來た事を知らせた。すると彼女は訪問用の一帳羅の襟卷（ショール）をつけて、嚴つい顏をし乍ら立ち上り、ナターシャの件について相談するため、ボルコンスキイ老公爵の所へ出掛ける由を告げた。

マリヤ・ドミートリエヴナの外出後、シャリメ夫人の女店員がロストフ一家を訪ねて來た。ナターシャは客間の隣室をしめ切つて、いゝ氣散じが出來たのを悅び乍ら、新調の服の寸法しらべに掛つた。彼女が下縫したばかりの未だ袖の無い上衣を着て、脊中の落着きがどうかと首を曲げ乍ら鏡を見てゐる時、客間で父親の聲と、今一人女の聲が元氣よく響き出した。此の女の聲は彼女に

顔を赤めさせた。それはエレンの聲であつた。ナターシャが工合を見てゐた上衣を脱ぎすてる暇もなく、もう戸が開いてベズーホヴ伯爵夫人が入つて來た、襟の高い澁い瑠璃色した天鵞絨の服を着て、人の好い優しい微笑を滿面に輝かせながら。

『Ah, ma délicieuse!(あゝ、我が美しき人よ。)』眞赤になつたナターシャに向つて彼女はかう言つた。『惚れぐ〳〵しますわ！ねえ、伯爵、本當にそんな法はありませんよ。』續いて入つて來る老伯爵にかう言つた。『現に莫斯科に住んでゐながら、何處へもお出掛けにならないなんて！もう〳〵わたしあなたの傍を離れませんわ！今夜わたし共でジョルジュ孃が朗讀するので、誰や彼や集ることになつてゐますが、若しあなたがジョルジュ孃よりもつと美しい、このお孃さん方を連れていらつしやらなかつたら、わたしもう存じませんからね。たくは不在でございますの、トゼーリの方へ出向きまして。ね。さうでなかつたら、たくをお迎へに上げるんですけれど……どうぞ是非いらしつて下さいな、八時頃でございますよ。』

彼女は恭しく會釋する知合の婦人服屋に點頭いて見せて、天鵞絨服の襞を見事にぱつと捌き乍ら、鏡の傍の肘椅子に腰を下した。彼女はひつきりなしにナターシャの美しさを褒めそやし乍ら、人の好い賑かなお喋りを止めなかつた。そして對手の着物をつく〳〵眺めて褒め立てた上、巴里から取り寄せた自分の新しい en gaz métalique（一種の紗）の服を自慢して、ナターシャにも同じ物を

作るやうに勸めた。

『でも、あなたには何でも似合ひますわね。』と彼女は言つた。

ナターシャの顔からは滿足のほゝ笑が消えなかつた。此の優しいベズーホヴ夫人の讃美に依つて、まるで花の咲いたやうな幸福の身になつたのを感じた。以前この人は傍へも寄れないほど豪い貴婦人のやうに思はれたが、今は自分に對してこれほど親切にしてくれると思ふと、ナターシャは愉快な氣分になつた。彼女は此の美しい親切な貴婦人に、惚れ込んで了つたやうな氣がした。又エレンはエレンで心からナターシャを讃美して、彼女を浮き立たせようと希つた。アナトーリからナターシャを取り持つやうに頼まれたので、彼女はこの目的のために、わざ〳〵ロストフ家へやつて來たのである。兄にナターシャを取り持つといふ事が彼女を興がらせた。

以前彼得堡で自分の手からボリースを横取りされたので、彼女はナターシャに怨があつたにも拘らず、彼女はもうそんな事など忘れて了つて、自己流の考へ方であるが、心の底からナターシャのためよかれと祈つてゐた。歸りしなに彼女は自分の被保護人を小陰へ呼んで、

『昨晩兄がわたし共で食事をしましたが——わたし達可笑しくつて笑ひころけたんですよ——何一つ食べようとしないで、あなたの事ばかりくよ〳〵思つてるぢやありませんか。兄はまるで氣が違ひさうなんですよ。Mais fou amoureux de vous, ma chère（けれどあなたが戀しさの餘りに狂つてゐるんですのよ。）』

ナターシャは此の言葉を聞くと牡丹色に顔を染めた。

『まあ、あの赤い顔、あの赤い顔、ナタリヤさん！』とエレンは言つた。『是非いらつしやいましな。ねえ、あなたが誰かを愛してらつしやるからつて、何も尼さん見たいな暮しをなさる理由にはなりませんわ。よしんばあなたが許嫁の身であるにしても、對手の方だつて自分の留守の間に、あなたが退屈で困つてゐらつしやるよりか、交際社會へお出になる方をお望みになりますわ。わたしはさう信じますね。』

「して見ると此の人は、わたしが許嫁だといふ事を知つてらつしやるんだ。して見ると此の人は主人のピエールと――あの正直なピエールと此の事を話して、面白がつたに相違ない。」とナターシャは考へた。「して見ると、これは何でもない事なんだ。」又もやエレンの感化で以て、以前恐しく思はれた事が單純な、自然な事に感じられた。「それに此の人は本當に豪い貴婦人で、而も優しい方なんだ。そして眞底からわたしを可愛がつて下さるらしい。」とナターシャは考へた。「燥いでならないつて譯はありやしない。」ナターシャは吃驚したやうな目を大きく開いて、エレンを見詰めながらかう思つた。

晝飯前にアフロシーモヴが眞面目な默り勝ちな樣子で歸つて來た。明らかに老公爵の許で敗北を取つて來たらしい。彼女は落ち着いて事の次第を話すには、未だ先刻の衝突で餘りに興奮してゐた。伯爵の質問に對しては、萬事都合よく行つた、明日くはしく話すからとのみ答へた。エレンの來訪と夜會の招待を知つて、マリヤ・ドミートリエヴナはかう言つた。

『わたしはベズーホヴを對手にするのは好きでもないし、又お勸めもしませんが、併しもう約束したとあれば出掛けなさい。うんと氣散じをしておいでなさい。』と彼女はナターシャに向いて言ひ足した。

一三

イリヤー伯爵は二人の令孃を連れて、ベズーホヴ夫人の許へ赴いた。夜會は可成り大人數であつた。併し一座の人は、殆どナターシャの知らぬ人ばかりであつた。老伯爵は此の一座が悉く放埒な身持で知られてゐる、男や女から成り立つてゐるのに氣附いて不滿を感じた。女優のジョルジュ孃は若い人達に取り卷かれて、客間の一隅に立つてゐた。佛蘭西人も幾人か居たが、其の中にはエレンの來京以來、家族同樣になつた醫師メチギエも交つてゐた、老伯爵は歌留多の仲間へ入らないで、娘達の傍を離れぬやうに心掛け、ジョルジュの朗讀が濟むと直ぐ歸らうと決心した。

アナトーリは戸口の所に立つてゐた。ロストフ一家の到着を待ち受けてゐるのは、一見して明かであつた。彼は老伯爵に挨拶するや、いきなりナターシャに近寄つて其の後から歩き出した。

ナターシャは彼の顔を見ると同時に、芝居の時と同じ感じ――自分は此の人に好かれてゐるといふ虚榮的な滿足と、二人の間に心の垣がなくなつてゐるといふ、恐怖の念に打たれたのである。

エレンは嬉しげにナターシャを迎へて、その美貌と化粧振を仰山に褒め立てた。彼等の到着後間もなく、ジョルジュ孃は扮裝のために部屋を出た。客間では椅子が竝べられて、人々は席に着き始めた。アナトーリはナターシャに椅子を薦めて、その傍へ坐らうとしたが、絶えずナターシャから目を放さずにゐる老伯爵が、その傍へ腰を下して了つた。で、アナトーリは後ろへ坐つた。

ジョルジュ孃は節々に凹みのある肥つた手を露はにして、赤い襟卷を一方の肩に引つ掛けた儘、自分のために殘された、肘椅子の間の空いた處へ出て來ると、不自然な姿勢で立ち止つた。感に堪へたやうな囁きが聞えた。

ジョルジュ孃は嚴肅な暗い目附で聽衆を見廻した後、我子に對する罪深い戀を唱つた詩を、佛蘭西語で誦し始めた。彼女は時に聲を高め、時に昂然と首を反らしながら囁くやうな聲を發し、時に目を剝き乍ら言葉を止めて、しや嗄れた音を出すのであつた。

『Admirable, divin délicieux（素的だね、人間業でない、見事ですわねえ！）』といふ聲が四方から聞えた。

ナターシャは肥つたジョルジュを眺めてゐたが、自分の前に行はれてゐる事を聞きもせず、見もせず、了解もしなかつた。彼女はたゞ自分が以前とはまるでかけ離れた、不思議な物狂はしい世

界――善惡賢愚の見境ひも附かない世界へ來て了つて、もう返る事が出來なくなつたのを感じたばかりである。後ろにはアナトーリが坐つてゐる。彼女は其の距離の近さを感じて、おづ〳〵と何物かを期待してゐた。

第一の獨白の後一座は悉く立ち上つて、自分の感銘を現すべくジョルジュ孃を取り圍んだ。

『何て美人でせうねえ！』他の人々と一緒に立ち上つて群集を押し分けつゝ、女優の方へ進んで行く父に向つて、ナターシャはかう言つた。

『僕はあなたを見てゐるから、さう思ひませんね。』ナターシャの後を追ひ乍らアナトーリが言つた。彼がかう言つたのは、ナターシャより外誰も聞く人の無い時であつた。『あなたは實に美しい方です……あなたにお目にかゝつた瞬間から、僕は絶えず……』

『さあ、行かう〳〵、ナターシャ。』娘の方へ戻つて來て老伯爵は言つた。『本當に美人だねえ！』

ナターシャはなんにも言はないで父に近寄り、吃驚したやうな怪訝な目附で其の顔を見つめてゐた。

それからまた諳誦が二つ三つあつて、ジョルジュ孃は立ち去つた。ベズーホヴ夫人は廣間の方へ移るやう一同に乞うた。

老伯爵は暇を告げようとしたが、即興的に催す事にした舞踏會の興を醒まさないでくれと、エ

レンが頻りに哀願するので、ロストフ一家は居殘る事になつた。アナトーリはナターシャにワルツを申し込んだ。其の踊の間に彼は對手の體や手を締めながら、あなたは ravissante（心目を悅ばす人）だ、僕はあなたを愛しますと言つた。蘇土蘭曲（エコセーズ）の時にも彼女は又クラーギンと踊つたが、彼等が二人切りになつた折、アナトーリは何にも言はないで、じつと對手の顏を見詰めてゐた。ナターシャはワルツの時男の言つた事は、夢で見たのではないかと半信半疑であつた。第一節の終りに、彼は又ナターシャの手を握り締めた。彼女は慴えたやうな目を上げた。併しその優しい目付や微笑の中には、何とも言へぬ恃む所ありげな、柔い表情が浮んでゐた。彼女は其の顏を見てゐると、言ふべき事も言へなくなつて了つた。彼女は伏目になつて、

『わたしにそんな事を言はないで下さい。わたしは許嫁の身で、他の人を愛してゐるのでございます。』と口早に言つて對手を見上げた。

アナトーリはその言葉を聞いて間誤つきもしなければ、落膽もしなかつた。

『僕にそんな話をするのは止して下さい。それが僕に取つて何でせう？ 僕は夢中に――夢中になつてあなたを戀してゐるんです。あなたがそんな魅惑的（チャーミング）だからと言つて、僕に何の責任がありますか？ あゝ、もう始めなくちやなりませんね。』

ナターシャは活き〳〵した、と同時に不安げな樣で、慴えたやうな目を大きく睜つて邊りを見廻

した。彼女は平生より快活らしく見えた。そして此の晩の事を殆ど何一つ覺えてゐなかつた。蘇土蘭曲（エコセーズ）と祖父（グロスファーテール）（獨逸の古舞踊）を踊つたとき、父は彼女をさし招いて歸らうと言つたが、ナターシャは少し置いてくれと賴んだ。何處にゐても、誰と話しても、彼女は自分の體に男の視線を感じるのであつた。一度こんな事を覺えてゐた。父の許を得て化粧室へ着物を直しに出ると、エレンが後からついて來て、兄の戀を笑ひ乍ら話し始めた。それから小さな長椅子部屋で、又もやアナトーリと出會つた。エレンはどこかへ消えて了つて、二人は差し向ひになつた。するとアナトーリは彼女の手を取つて、優しい聲で言ひ出した。

『僕はあなたの家へ出入りする譯に行きません。併し一體これ切りあなたに會へないのでせうか？ 僕は氣も狂ふ程あなたを戀してゐます。本當にもうこれつ切り？……』と彼は對手の通路を塞ぎ乍ら、自分の顏をナターシャの顏に近寄せた。

きら〳〵光る大きな男らしい目が、恐しく自分の目から近い所にあつたので、彼女は此の目より外なんにも見る事が出來なかつた。

『ナターリイ！？』と彼の聲が尋ねるやうな調子で囁いた。そして誰か痛いほど彼女の手を握り締めた。『ナターリイ！？』

「わたしなんにも分らない、わたし何も言ふ事はないわ。」と彼女の目が言ふやうであつた。

熱い脣が彼女の脣へ押し當てられた。その瞬間彼女は再び自由になつたやうに感じた。と、部屋の中でエレンの足音と衣摺れの響が聞えた。ナターシャはその方を振り返つた。そして眞赤な顔をしてぶる〳〵慄へ乍ら、憎えた物問ひたけな目附で男を振り仰いで、戸口の方へ歩み去つた。

『Un mot, un seul, au nom de Dieu（一言、たつた一言、後生ですから。）』とアナトーリは言つた。

彼女は立ち止つた。彼女は男の口から此の一言が聞きたかつたのである。この一言こそ彼女に今の出來事を説明してくれるに相違ない。彼女もそれに對して答へたかつたのだ。

『Nathalie, un mot, un seul（ナターリイ、たつた一言。ほんの一言。）』何と言つてい、か分らないやうな風で、彼はかう繰り返した。繰り返してゐる中にエレンが二人の傍へ近付いた。

エレンは再びナターシャと一緒に客間へ出た。ロストフ親子は夜食の席に殘らないで辭し去つた。

歸宅後ナターシャは夜つぴて眠らなかつた。一體自分は誰を愛してゐるのだらう――アナトーリかアンドレイ公爵か、彼女は此の解決し難い問題に苦められた。彼女はアンドレイ公爵を愛してゐる――自分がどんなに烈しく公爵を愛してゐるかといふ事は、彼女も明らかに知つてゐた。併しアナトーリをも同樣に愛してゐる、これは疑ふ餘地もない事である。「さうでなかつたら、こんな事になる筈はない？」彼女は考へた。「あの事があつてから別れるときに、あの人の笑顔

を以て答へる事が出來た以上――こんなになるまで打つ棄つて置いた以上、わたしは一目見るや否や、あの人を思ひ初めたものとしなくちやならない。つまりあの人が親切で立派な人なので、愛しないでは居られなかつたと云ふ事になる。あゝ、若しわたしが兩方とも愛してゐるとしたら、一體どうしたらいゝのだらう？」これ等の恐しい問題に對して何等の答をも得る事なく、彼女は心の中でかう繰り返してゐた。

一四

やがていつもの煩はしさ忙しさと共に朝が來た。一同は起き出して、動いたり話したりし始めた。再び婦人服屋がやつて來る、マリヤ・ドミートリエヴナが居間から出る、召使が茶の用意の出來た事を知らせる……ナターシャは大きく見開いた目で、自分に注がれたすべての視線を捕へようとするかの如く、不安げに人々を見廻しながら、以前と同じに見せようと努めた。

朝飯の後マリヤ・ドミートリエヴナは（それは彼女が一日中で一番機嫌のい、時であつた）自分の肘椅子に坐つて、ナターシャと老伯爵を呼び寄せた。

『ねえ、ロストフさん、わたしは今あの事をすつかり考へましたよ。それで一つかう云ふ事をお勸めしようと思ひましてね。』と彼女は言ひ出した。『御承知の通り、昨日わたしはボルコンスキ

ィ公爵の所へ行つて、いろ〳〵談合して見ました……お爺さん吸鳴り附けようとしたが、併しわたしを吸鳴り負かす事は出來ません。わたしはあの人にすつかり並べて聞かしてやつた！』

『所で、あの人は何うでした？』と伯爵は訊ねた。

『あの人が何ういふものですか？あゝいふ分らずやですもの……てんで聞かうともしやしません。だから二人掛りで、あの可哀さうな娘さんを苛めたゞけです。で、わたしがお勸めしようといふのは他でもありません、用事を片附けて一先づ家へ――愉樂村（オトラード／ノエ）へ歸つて……そこで待つたらどうです……』

『あら、いやですわ！』とナターシャが叫んだ。

『いゝえ、歸るんですよ。』とアフロシーモヴが言つた。『そしてあつちで待つんですよ。若し花婿さんが此處へ歸つて來たら、喧嘩はどうせ免（のが）れつこなしですよ。だからあの人がお爺さんと差し向ひでよく話し合つて、それからあんたの所へ出向く事にした方がいゝんです。』

老伯爵はこの勸告の尤もなことを曉つて、直ぐそれに贊成した。よし老公爵が折れて出るとしても、それならばなほの事も少し經つてから莫斯科なり、禿山（ルイシエゴール）なりへ出掛けた方がよし、又さうでないとしても、父の意志に反いて結婚の出來る所は、只愉樂村（オトラード／ノエ）ばかりであつた。

『いや全く本當です。』と伯爵は言つた。『只わざ〳〵此方から出掛けて、娘まで連れて行つたのを殘念に思ひますよ。』

『何の、殘念がる事は少しも有りません。現在此處に來てゐながら、挨拶しない譯に行かないぢやありませんか。それでも厭だと云ふのはあの人の勝手です。』アフロシーモヴは婦人袋（リヂキュール）の中へ手を突つ込んで、何やら探し乍らかう言つた。『それに衣裳も出來たんですもの、この上待つ事はありませんさ。若し何か足りないものが有つたら、わたしが送つて上げますよ。全くお氣の毒ですけれど、しかし綺麗に歸つた方がよろしい。』

婦人袋（リヂキュール）の中で探してゐたものが見附かつたので、マリヤはそれをナターシャに渡した。それはマリヤ嬢からの手紙であつた。

『お前さんへ宛てた手紙ですよ。あの娘（こ）も煩悶してゐますよ、可哀さうに！お前さんを嫌つてゐるやうに思はれやしないかと、それを心配してゐるんですよ。』

『え、、全くあの人はわたしを嫌つてらつしやるんだわ。』とナターシャは言つた。

『馬鹿な、そんな事を云ふもんぢやありません。』とマリヤ・ドミートリエヴナは叫んだ。

『誰が何と言つたつて本當にしないわ、あの人が嫌つてゐるのはちやんと分つてゝよ。』手紙を受け取り乍ら、ナターシャは大膽にかう言つた。その顏には愛想もこそもない。毒々しい思ひ切つた色が浮んだので、マリヤ・ドミートリエヴナも思はずじつと彼女を見詰めて眉をしかめた。

『ねえお前さん、そんな返事の仕方はありませんよ。』と彼女は言つた。『わたしが言つた以上、間違ひありません。返事を書きなさい。』

ナターシャは返事もしないで、マリヤ孃の手紙を讀みに居間へ入つた。

マリヤ孃は次のやうに書いてゐた。自分は、二人の間に生じた誤解のため狂はんばかり惱んでゐる。父の感情がどうであらうと、自分は兄の選んだ愛人として、貴女を愛しないではゐられない。自分は兄の幸福のために、あらゆるものを犧牲にする覺悟でゐる、何うかそれを信じて頂きたい。

『とは申せ!』彼女はかう書いた。『父があなたに良からぬ感情を抱いてゐるなど、お思ひにならないで下さいませ。父は病身な老人ですから大目に見て頂かねばなりません。父は度量の廣い親切な人でございます。それゆゑ我子に幸福を與へてくれる人を、愛しないと云ふ筈はありません。』

續いてマリヤ孃は再び相まみゆべき時を指定して欲しい、とナターシャに乞うた。

この手紙を讀み終ると、ナターシャは返事を書かうと思つて書卓(ライチングテーブル)へ向つた。『Chère princesse (親愛なる公女よ。)』と彼女は手早く機械的に書いて筆を止めた。昨夜あゝいふ事のあつた後で、一體まあ何と書く事が出來よう?「さうだ、さうだ、あれはみんな本當にあつたのだ。そして今はもうすつかり事情が違つて了つたのだ。」書きさしの手紙に對した儘、彼女はこんな事を考へた。「あの人の

方は斷らなくちやならない。でも、本當にさうしなくちやならないかしら? それは恐しい!……」かういふ恐しい事を考へないために、彼女はソーニャの部屋へ行つて、一緒に刺繍の模樣を探し始めた。

食後ナターシャは居間へ退いて、再びマリヤの手紙を取り上げた。「本當にもうすつかりお了ひになつたのか知ら? 本當にかうまで早くこんな事になつて、以前の事を何もかも打ち崩して了つたのか知ら?」彼女は以前と同じ强い力を以て、アンドレイ公爵に對する愛を想ひ起した。と、同時にクラーギンをも愛してゐる事が感じられた。彼女はアンドレイ公爵の妻となつた自分をまざまざと想像して、今迄幾度心の中で空想したか知れない、彼と同棲した時の幸福な畫面をも描いて見た。併しそれと同時に、昨日のアナトーリとの出會ひをば、興奮のために燃えるやうな氣持を感じつゝ、細かい所まで思ひ浮べてゐるのであつた。

「どういふ譯で此の二つが一時に獲られないのかしら?」時とするとまるで頭が暗くなつて了つて、彼女はこんな事を考へるのであつた。「さうしたら、始めてわたしはすつかり幸福になれるんだ。けれど今は何方か選まなくちやならない。そして二人の中どちらが缺けても、わたしは幸福になれないのだ。たゞアンドレイ公爵には有りの儘を打ち明けるのも、また祕密にして置くのも、兩方とも出來ない事だ。所が此方の方へつけば、何(なん)にも厭な思ひをしないで濟む。けれども

あれほど長く生活の目標にしてゐた、アンドレイ公爵を愛すると云ふ幸福を、實際永久に見棄てなくちやならないのかしら？」

『お嬢さま。』と一人の小間使が部屋へ入つて來て、祕密らしい樣子で小聲に囁いた。『誰か妙な男が、これをお渡ししてくれと申しました。』と小間使は手紙を差し出した。

『たゞ後生ですから……』と小間使は未だ何か言ひ掛けたが、其の時ナターシャは何も考へないで機械的に封を切り、アナトーリの戀文を讀み始めた。併し彼女には其の文言が一つも分らなかつた。たゞ手紙はあの人から來たのだ、自分の戀してゐる男から來たのだ、といふ事だけが分つてゐるだけだつた。「さうだ、わたしは戀してゐる、でなければ今度のやうな事が擡る筈がない、自分の手の中にあの人の手紙が有らう筈はない！」

ドーロホフがアナトーリのために作つてやつた此の戀文を、震へる手で持ち乍ら讀んで行く中に、ナターシャは自分の感じてゐる事が何もかも木精（こだま）のやうに、この手紙に現れて來るやうな氣がした。

『昨日の晩から僕の運命は決しられました。あなたに愛されるか死ぬるか、二つに一つです。もう他に仕方がありません。』かう云ふ文句で手紙は始つてゐた。それから彼はこんな風に書いてゐた。あなたの兩親があなたを自分――アナトーリにくれないのは、自分もよく承知してゐる、

それには祕密な譯があつて、あなた一人だけでなければ打ち明ける事が出來ない。併しあなたが自分を愛するならば、たゞ一言「はい」と云へばいゝのだ、さうすれば如何なる人間の力も、二人の幸福を妨げる事は出來ない、愛はすべてを征服する。自分はあなたを奪つて世界の端まで連れて行く。

「さうだ、さうだ、わたしはあの人を戀してる！」とナターシャは考へた、二十度くらゐ此の手紙を繰り返して、一語々々に何か特別な深い意味を探し出しながら。

此の晩マリヤ・ドミートリエヴナはアルハーロフ家へ出掛けるので、二人の令嬢にも一緒に行かないかと勸めたが、ナターシャは頭痛を口實にして家へ殘つた。

一五

夜遲く歸つて來ると、ソーニャはナターシャの部屋へ入つた。すると意外にも彼女は着換もせずに、長椅子の上で眠つてゐるではないか。傍らなる卓の上には、アナトーリの手紙がひろげたまま置いてあつた。ソーニャは手紙を取り上げて讀み始めた。

彼女は讀み終ると、その手紙の說明を求めるやうに、ナターシャの寢顏を見入つた。が、その說明は發見する事が出來なかつた。彼女の顏は穩かにつゝましく、如何にも幸福さうであつた。

ソーニャは息切れがしないやうに胸を押へ、恐怖と興奮のため眞蒼になつて、わな〳〵慄へながら肘椅子に腰を下すと、さめ〴〵と泣き始めた。

「どうしてわたしは何にも氣が附かなかつたのだらう？どうしてかうまで事が進んで了つたのだらう？一體アンドレイ公爵に對する戀は醒めて了つたのかしら？それにどうしてクラーギンをこんなになるまで近附けたんだらう？あの男は嘘つきの惡者だ、それは分り切つた事だ。若し此の事がニコラスの耳に入つたら、あの優しい高潔なニコラスがどうなさる事だらう？成程、これだからナターシャが一昨日も、昨日も、今日もわく〳〵して、思ひ切つたやうな、不自然な顏附をしてゐたのだ。」とソーニャは考へた。「けれど、ナターシャがあの男を愛するなんて筈はない！多分誰から來たのか知らないで、この手紙の封を切つたんだらう。そして大方腹を立てた事だらう。此の女がそんな事をする筈はないもの！」

ソーニャは涙を拭いてナターシャに近寄り、再び其の顏を眺めるのであつた。

『ナターシャ！』彼女はやつと聞えるか聞えないかの聲でかう言つた。

ナターシャは目を醒した、と、ソーニャの姿が目に入つた。

『おや、歸つたのね？』

彼女は眠から覺めた瞬間によくある、元氣のい、優しい身振で友を抱きしめた。が、ソーニャの

顏に困惑の色を認めると、彼女の顏も困惑と疑念の色を現した。

『ソーニャ、あんた手紙を讀んだの！』

『え、。』とソーニャは低い聲で言つた。

ナターシャは勝ち誇つたやうにほゝ笑んだ。

『ソーニャ、わたしもう、』と彼女は言つた。『わたしもうあんたに隱して居られなくなつた。あゝんたにも分るでせう、わたし達はお互に愛し合つてゐるのよ！……ソーニャ、あの人の手紙にはね……ソーニャ……』

ソーニャは自分の耳が信じられないやうに、目を一杯に睜つてナターシャを眺めた。

『そしてボルコンスキイは？』と彼女は言つた。

『あゝ、ソーニャ、あゝ、どんなにわたしが幸福だか、それがあんたに分つたらねえ！』とナターシャは言つた。『あんた愛つて何んなものか分らないでせう……』

『だけどナターシャ、一體あれはもう駄目になつちやつたの？』

ナターシャは問の意味が分らないかの如く、目を大きく睜つてソーニャを見つめた。

『それで何うなの、あんたアンドレイ公爵の方を斷るつもり？』とソーニャは訊ねた。

『あゝ、あんたは何にも分らないのねえ。そんな馬鹿々々しい事を言はないで頂戴。ね、お聞

きなさい。』

一寸じれつたさうな様子を見せて、ナターシャはかう言つた。

『い、え、わたしそんな事本當に出來なくつてよ。』とソーニャは繰り返した。『わたしにや分らないわ。あんたはまる一年も一人の人を愛して居ながら、どうして急に……だつてあんたは、あの人をたつた三度しきや見た事が無いでせう。ナターシャ、わたしあんたの言ふ事が信じられなくつてよ、あんた冗談言つてるんでせう。たつた三日で何もかも忘れつちまつて、そんなに……』

『三日、わたしはもう百年もあの人を戀してるやうな氣がしてよ。わたしあの人より以前には、誰も一度も戀した事が無いやうな氣がするわ。あんたにやこんな事分らないでせう。ソーニャ、まあ待つて頂戴、そこへお坐んなさいよ。』ナターシャは彼女を抱いて接吻した。

『こんな事がよくあるつてことは、わたしも話に聞いてたの、あんたも屹度聞いた事があるでせう。だけど、こんな戀を經驗したのは、今度が始めてだわ。以前なんかのとはまるで違ふのよ。あの人を見ると直ぐ、あの人はわたしの領主で、わたしはあの人の奴隷のやうな氣がしたの。そしてあの人を愛しないではゐられないやうに感じたの。さうだわ、奴隷だわ！あの人の命令なら何でもするわ。あんたにやこんな事分らないでせう。どうしたらいゝでせう？わたしどうしたらいゝでせう、ソーニャ？』ナターシャは仕合せらしい、しかも惜えたやうな顔付でかう言つた。

『けれどもあんた、自分が何をしてるか考へて御覽なさいよ。わたしはこの儘打つちやつて置けません。こんな祕密の手紙なんか……どうしてあんたはこんなになるまで打つちやつて置いたの？』恐怖と嫌惡の念を隱さうともしないで、彼女はかう言つた。

『わたしさう言つたぢやなくつて、』とナターシャは答へた。『わたしには意志つてものがないのよ。何うしてあんたにそれが分らないのか知ら。わたしはあの人が戀しいの！』

『ぢや、わたしはそんな事をさせないから、わたしみんなに話してよ！』堰を切つて流れ出る涙と共に、ソーニャはかう言つた。

『あんた何を言ふの、後生だから……若し話したりなんかしたら、あんたはわたしの敵よ。あんたはわたしの不幸を望むんだわ、あんたはわたし達が生木を裂かれるのが望みなんだわ……』

ナターシャのかうした恐怖の樣を見ると、ソーニャは友に對する羞恥と憐憫の涙がこみ上げて來た。

『だけど、あんた方の間にどんな事があつたの？』と彼女は訊ねた。『あの人が何と言つたの？何故あの人は家へ來ないの？』

ナターシャは此の問に答へなかつた。

『後生だからソーニャ、誰にも言はないで頂戴、わたしを苦しめないでね。』ナターシャはしつこ

く頼んだ。『こんな事を干渉するもんぢやないわ。あんたそれを覺えて、頂戴。わたしあんたに打ち明けたんだもの・・・』

『だけど此の祕密は何のためなの？何故あの人は家へ出入りしないの？』とソーニャは訊ねた。『何故あの人は直接に結婚を申し込まないの？だつて、若しどうしてもさう言ふ事なら、アンドレイ公爵はあんたに絶對の自由を與へてらつしやるぢやないの。だけど、わたしそんな事を本當にしなくつてよ。ナターシャ、その祕密の原因といふのは何だか考へて見て？』

ナターシャは吃驚した目附でソーニャを眺めた。この問題は彼女に取つても始めて心に浮んだものらしい。彼女は何と答へていゝか分らなかつた。

『どんな原因か知らないわ。けれどかう書いてある以上、何か有るに相違なくつてよ！』

ソーニャは溜息をついて、疑はしげに首を振つた。

『若し原因があるとすれば・・・・』と彼女は言ひ掛けた。

併しナターシャは對手の疑念を察して、あはてたやうに遮つた。

『ソーニャ、あの人を疑つちやいけないわ、いけないわ、いけないわ、分つて？』と彼女は叫んだ。

『一體あの人はあんたを愛してゐて？』

『愛してゐつて？』友の悟りの悪いのを憫むやうに微笑を浮べて、ナターシャは鸚鵡返しにかう言つた。『だつてあんたは手紙を讀んだでせう、あの人を見たでせう？』

『でも、あの人が若し下劣な人だつたら？』

『あの人が？・・・・下劣な人ですつて？あゝ、あんたがあの人を知つてたらばねえ！』とナターシャは言つた。

『若しあの人が高潔な人だつたら、自分の望みを立派に打ち明けるか、それともあんたに會ふのを止めるか、何方かにする筈ですわ。若しあんたがさうするのが厭だつたら、わたしがして上げますわ。わたしがあの人に手紙を書きます。お父さんに言つて上げます。』きつぱりとソーニャがかう言つた。

『だつて、わたしあの人なしには生きてゐられない！』とナターシャは叫んだ。

『ナターシャ、わたしあんたの氣が知れなくつてよ。一體あんたは何を言つてゐるんでせう！お父さまやニコラスの事を思ひ出して頂戴。』

『わたしあの人のほか誰も要らない、わたし誰も愛しない。あんたはあの人が下劣だなんて、よくまあ言へることね？わたしがあの人を愛してることを、一體あんたは知らないの？』とナターシャは叫んだ。『ソーニャ、あつちイいらつしやい！わたしはあんたと喧嘩したくないから、あ

つちィいらつしやい、後生だから行つて頂戴。わたしがどんなに苦しんでるか、あんたにも分るでせう。』ナターシャは苛立たしさを壓へつけたやうな、自暴自棄の聲で憎々しさうにかう叫んだ。ソーニャはわつと泣聲を上げ乍ら部屋から駈け出した。

ナターシャは卓に近寄つた。そして一分間も考へる事なしに、朝の中ぢう書くことの出來なかつた、マリヤあての返事を認めた。此の手紙の中に彼女は次のやうな意味の文句を、簡單にマリヤに書き送つた——二人の誤解もみんな終りを告げて了つた。自分はアンドレイ公爵が出發の際に自由を與へてくれた、その寛大な處置を利用して、すべての事を忘れて貰ひたいと思ふ。自分に罪があればお許しを願ひたい。併し自分は公爵の妻となる譯に行かない——此の瞬間彼女はこんな事を書くのが、極めて簡單明瞭な容易しい事に思はれたのである。

金曜日には、ロストフ一家は田舍へ歸らなければならなかつた。老伯爵は水曜日に買手と一緒に、莫斯科在の領地へ出掛けた。

老伯爵の出立の日ソーニャとナターシャとは、カラーギン家の大晩餐會に呼ばれてゐたので、マリヤ・ドミートリヴナが二人を連れて行つた。此の晩餐會でナターシャは、再びアナトーリと會つ

た。ソーニャはナターシャが人に聞かれないやうにして、何やら彼と話してゐるのも見たし、食事の間ぢう、以前より一層そは〳〵してゐるのにも氣が附いた。二人が家へ歸つたとき、ナターシャは自分から先に立つて、ソーニャの待ち設けてゐる相談を始めた。

『ねえ、ソーニャ、あんたはあの人の事で色んな馬鹿を言つたわねえ。』とナターシャは從順しい聲で言つた。それは丁度子供が大人から褒めて貰ひたいと思つて、何か言ふやうな聲であつた。『わたしは今日あの人と相談したのよ。』

『え、一體何を、何う？え、あの人は何と言つて？ナターシャ、わたしはあんたが腹を立てゝゐないので、どんなに嬉しいか知れないわ。すつかり言つて聞かして頂戴、そつくり本當の事を、あの人何と言つて？』

ナターシャは一寸考へた。

『あゝ、わたしとおんなじやうに、あんたもあの人を知つてくれたらねえ！あの人の言ふにはね……あの人はわたしがボルコンスキイに約束した時の樣子を聞いたのよ。そしてね、わたしの心一つで斷る事が出來ると聞いて、大變悅んでよ。』

ソーニャは沈み勝ちに吐息をついた。

『だつて、あんたはボルコンスキイに斷つて遣りやしないでせう。』と彼女は言つた。

『だけど、事に依つたら、斷つたかも知れなくつてよ！事に依つたら、ボルコンスキィとの關係は、すつかり切れちまつたかも知れなくつてよ、なぜあんたはわたしの事をさう惡く思ふの？』

『わたし何とも思やしなくつてよ、わたしたゞ合點が行かないのは・・・』

『待つてらつしやい、ソーニャ、其の中にすつかり分つてよ。あの人がどんな人かつて事が分るから。あんたね、わたしの事もあの人の事も、惡く思つちや厭よ。』

『わたし誰の事も惡く思やしないわ。わたしはみんなが好きで、そしてみんなが氣の毒なのよ。だけど、わたしどうしたらいゝんだらう？』

ソーニャはナターシャの持ち掛ける、甘つたるい調子に卷き込まれなかつた。ナターシャの顏の表情が和らいで、媚を呈するやうになればなる程、ソーニャの顏はいよ〳〵眞面目に嚴格になつた。

『ナターシャ、あんたはわたしに此の話をしちやいけないと言つたでせう、だからわたし言はなかつたのよ。所が、今日はあんたの方から始めたんですよ。ナターシャ、わたしあの人を信じなくつてよ。あの祕密は何のためなの？』

『あゝ、又、又！』ナターシャは遮つた。

『ナターシャ、わたしあんたの事が心配で堪らないの。』

『何で心配なの？』

『わたしあんたが一生を駄目にして了やしないかと思つて、それが心配だわ。』とソーニャは思ひ切つて言つたが、自分で自分の言つた事にぎよつとした。

ナターシャの顏は再び憎惡の色を現した。

『え、駄目にするわ、出來るだけ早く駄目にするわ。あんた方の知つた事ぢやなくつてよ。困るのはわたしだけで、あんた方ぢやないんだから、打つちやつといて頂戴、わたしあんたを憎むわ。』

『ナターシャ！』とソーニャは慴えたやうに呼びかけた。

『憎むわ、憎むわ！あんたは永久にわたしの敵よ！』

ナターシャは部屋を走り出た。

ナターシャはもうソーニャと口を利かないで避けるやうにした。そして例の罪人のやうなわくわくした驚きの表情を浮べて、一つの仕事からまた次の仕事へ移るかと思ふと、すぐそれも抛り出して了ひ乍ら、室々を歩き廻るのであつた。

ソーニャは隨分つらい仕事であつたけれど、目を放さないやうに友を注視して居た。

老伯爵の歸つて來るべき前の日に、ナターシャが朝の中ぢう何やら待ち設けるもの、如く、始終客間の窓際に坐つてゐて、通りすがりの軍人に何やら合圖をした。ソーニャはそれに氣が附いた。彼女は其の軍人をアナトーリと見て取つた。

ソーニャは一層注意深く友を觀察した。そしてナターシャが晝食の間も日が暮れてからも、妙に不自然な狀態でゐるのに氣が附いた。何か問ひ掛けられてもとんちんかんの返事をしたり、言ひかけた言葉を途中で止めたり、何でもかでも矢鱈に笑つたりする。

茶の後でソーニャは一人の小間使が、ナターシャの居間の戸口に立つて、おづ〳〵した樣子で自分が出て行くのを、待ち兼ねてゐるのに氣が附いた。彼女は小間使をやり過してから戸口で立聞した。そしてまた手紙が渡されたのを知つた。

突然何もかも明瞭になつた。ナターシャは今夜何か恐しい事を企んでゐるのだ。ソーニャは戸を叩いて音づれた。が、ナターシャは入れなかつた。

「ナターシャはあの男と一緒に逃げようとしてゐるんだ！」とソーニャは考へた。「どんな事でもし兼ねない人だもの。今日ナターシャの顏に何だか特別頼り無さゝうな、而も思ひ切つた表情が見えたと思つた。そしてお父さんに別れる時泣き出したつけ。」ソーニャはこんな事を想ひ出した。「さうだ、確かにナターシャはあの男と一緒に逃げるんだ――併しわたしはどうしたものだらう。」ナターシャに何か恐しい目論見がある事を證據立てる兆候を、今になつていろ〳〵想ひ起しながらソーニャはかう考へた。「お父さんはゐらつしやらないし、本當にどしたものかしら。クラーギンに手紙を書いて辯明を要求しようか？併しあの男に返事を書けと命令する人がどこにあるんだらう？

何か不幸が起つた場合にと、アンドレイ公爵が仰しやつたやうに、ピエールさんに手紙を書かうか？……だけど若しかしたら、ナターシャは本當にボルコンスキイの方を斷つて了たかも知れない（昨日マリヤさんに返事を出したんだから）。お父さんはゐらつしやらないし……」それかと言つて、あれ程ナターシャを信じ切つてゐる、此の家の主人に打ち明けるのは恐しいやうな氣がした。「併し何方にしろ、」ソーニャは暗い廊下に立つてかう考へた。「今度この機會を外したら、わたしが此の一家の恩義を忘れないといふ事も、ニコラスを愛してゐる事も、永久に證明する時は來やしない。さうだ、わたしは二晩でも三晩でも寢やしない。そして此の廊下を離れないで、力づくでもナターシャを出さない事にしよう。そして此の一家に落ちかゝらうとしてゐる汚名を、未然に防がなくちやならない。」と彼女は考へた。

一六

アナトーリは最近ドーロホフの許へ引き移つた。ロストーヴ掠奪の計畫はもう二三日前から、ドーロホフに依つて考慮され、準備されてあつた。ソーニャがナターシャの戸口で立聞して、友を護らうと決心した當日は、この計畫が實行される手筈になつてゐた。ナターシャは夜の十時に裏口の階段から出て、クラーギンの手へ投ずる約束をした。クラーギンは彼女を用意の三頭立橇（トロイカ）に乘

せて、莫斯科を去る六十露里(ヴエルスター)の石村(カーメンカ)へ連れて行き、其處で兼て頼んである破門僧に結婚式を擧げて貰ふ事になつてゐた。石村には換へ馬が用意してあつて、それがヴルシヤワ街道まで二人を連れ出してくれると、二人は其處から郵便馬車で、外國へ逃れ去る手筈であつた。

アナトーリは旅行免狀も、郵便馬車の命令書も、金も持つてゐた。一萬留(ルーブリ)は妹から貰ひ、一萬留はドーロホフの周旋で借り出したのである。

二人の立會人――一人はフヂースチコフといふ官吏上りで、ドーロホフが勝負のために使つてゐる男、今一人はマカーリンといふ豫備の輕騎兵で、クラーギンに對して無限の愛を捧げてゐる、人の好い弱い男であつた。この二人は次の間で茶の卓(テーブル)に向つてゐた。

壁から天井まで波斯(ペルシヤ)織の毛氈や、熊の皮や、武器などで飾られたドーロホフの大きな書齋には、旅行用の韃靼外套を着、長靴を穿いた主人公が、開け擴げた事務机の前に坐つてゐた。机の上には算盤や紙幣(さつ)の束が置いてあつた。アナトーリは軍服の胸をひろげて、立會人のゐる部屋から書齋を通り抜け、佛蘭西生れの侍僕が最後の荷物を片附けてゐる、奥の間へ掛けて歩き廻つてゐた。

ドーロホフは金を計算して記入してゐた。

『そこでと、』彼は言つた。『フヂースチコフに二千留(ルーブリ)やらなけやならんね。』

『うん、やるがいゝさ。』とアナトーリが言つた。

『マカールカは（彼等はマカーリンをかう呼んでゐた）君のためなら慾得なしに、火の中でも水の中でも飛び込まあね。さあ、これで勘定も濟んだ。』對手に書付けを見せ乍ら、ドーロホフはかう言つた。『いゝかね？』

『無論いゝとも。』見受ける所、ドーロホフの言葉を聞いてゐないらしく、絶えず顔から微笑を消さないで、じつと目の前を見詰めながらアナトーリを振り返つた。

ドーロホフは事務机の蓋をばたんと閉めて、嘲笑を含みながらアナトーリが言つた。

『ねえ君、こんな事すつかり止しちまはないか、未だ時間は有るぜ！』と彼が言つた。

『馬鹿ッ！』とアナトーリは言つた。『下らん事を言ふのは止せよ。本當に僕がどんなに……全く此の心持は何ともかとも言へないんだよ。』

『全くだ、止しな。俺は眞面目に言つてるんだぜ。君の思ひ立つた事は全く冗談ぢやないぜ。』

『えゝ又が、又からかふのか？畜生、勝手にしろ！ふん！』とアナトーリは顔をしかめ乍ら言つた。『本當にそんな馬鹿げた洒落どころぢやないんだよ。』彼はぷいと部屋を出た。

彼が出て行つたとき、ドーロホフは馬鹿にしたやうな、同時にへりくだつたやうな薄笑ひを浮べた。

『君、待ち給へ。』と彼はアナトーリの後から聲を掛けた。『冗談なんか言つてゐるんぢやない、お

れは眞面目なんだよ。おい、此方い來いよ。』

アナートリは再び部屋へ入つて來た。そして何時とはなく友に征服されて行くらしい樣子で、一生懸命に注意を集中しようと努めながら、ドーロホフを見詰めた。

『おい、聞きな、最後に一こと言ひたい事があるんだ。一體何のために俺が冗談なんか言ふものかね？何か俺が君に逆らつた事があるかい？君のために萬端の用意を整へたのは誰だい？坊主を見附けたのは誰だい？旅行券を手に入れたのは誰だい？金を工面したのは誰だい？みんな俺ぢやないか？』

『さあ、だから僕も有難いつて言つてるんだよ。一體僕が君に感謝してないと思つてるのかい？』アナトーリは溜息をついて對手を抱きしめた。

『俺は君を助けてやつた。併しそれでも、有りの儘を言はざるを得ないんだ。全く危險な事だし、よく考へて見れば、馬鹿々々しい話さね。君があの娘を連れて逃げる。それはまあいゝとしても、其の儘ぢや濟みやしないからね。直ぐ君の細君のある事が知れらあね。すると君は刑法に問はれるぢやないか・・・』

『えゝ！馬鹿々しい！』アナトーリは又もや顏をしかめてかう言ひ出した。『もう君にはよく說明しといたぢやないか、え？』感じの鈍い人が時稀自分の智慧で到達した推論の價値に關して、

よく感じるやうな特殊な熱情を以て、アナトーリはもう百度くらゐドーロホフに繰り返した事のある、同じ論證を持ち出すのであつた。『もう君にはよく說明しといたぢやないか。僕はかういふ風に決めてるんだよ、若し此の結婚が效力のないものだつたら、』と彼は指を一つ折つて、『つまり僕に責任はないといふ事になるぢやないか。若し假りに有效だとしても、どうせ外國へ行きや、そんな事は誰にも知れつこないからね。え、さうぢやないか？兎に角言はないでくれ、何にも言はないでくれ。』

『全く止しな！ただ自分の體を縛るばかりだよ・・・』

『えゝ、引つ込んでろい！』と言つてアナトーリは髮を拶り乍ら次の間へ出た。が、直ぐに戻つて來て、ドーロホフの前にある肘椅子へ胡坐をかいた。『これは一體何のこつたらう。おい！一寸見給へ、この動悸！』彼はドーロホフの手を取つて自分の心臟に當がつた。『Ah! quel pied, mon cher, quel regard! Une déesse!! (ねえ君、あの足はどうだらう、あの目附は！まるで女神だ!!) ねえ？』

ドーロホフは冷やかにほゝ笑んで、例の美しい高慢な目を輝かせつゝ、も少し慰んで遣りたさうな風付で、じつと對手を見詰めてゐた。

『所で、金が無くなつたら、その時はどうする？』

『その時はどうするつて？え？』アナトーリは未來といふ想念に突き當つて、心から途方に暮

れたやうな風で鸚鵡返しにかう言つた。『その時はどうするつて？さあ、僕もどうするんだか分らないや……え、、そんな下らない事を言ふ必要はない！』と彼は時計を見た。『もう時刻だ！』

アナトーリは奥の間へ入つた。

『おい、もう直ぐかい？何をいつまでもそこでぐづ〳〵してゐるんだい？』彼は召使の者にかう叫んだ。

ドーロホフは金を片附けてから召使を呼び、門出の杯と夜食の用意をするやうに命じて、フヴースチコフとマカーリンの坐つてゐる部屋へ入つた。

アナトーリは書齋で頰杖つき乍ら、長椅子の上に倒れた儘、物思はしげに微笑しつ、、美しい口の中で何やら優しくつぶやいてゐた。

『來いよ――何か食べないか。おい、飲みな！』と次の間からドーロホフが聲を掛けた。

『いやだよ！』依然として微笑を續けながら、アナトーリが答へた。

『來いつてば、バラーガが來たぜ。』

アナトーリは起き上つて食堂へ入つた。有名な三頭馬車（トロイカ）の馭者のバラーガは、もう六年越しアナトーリとドーロホフを知つてゐて、自分の橇を此の二人に用立てゝ來た。アナトーリの聯隊がトヴェーリに駐屯してゐる時、バラーガは彼を乘せて夕方トヴェーリを出て、明け方までに莫斯科へ着

き、次の晩また元來た方へ連れて歸つた。こんな事も一度や二度で無かつた。また追手を避けてドーロホフを逃がしてやつた事も一再に止らない。又ジプシィの女や彼の所謂『お孃さん方』と一緒に此の二人をのせて、市中を練り廻した事も一度や二度でない。二人の仕事のために、莫斯科で迫行人や辻馬車の馭者を轢き殺して、その都度彼の所謂『旦那方』に助けられた事も珍しくない　此の二人のために追ひ殺した馬も一匹や二匹できかなかつた。二人のために撲られた事も、好物の三鞭酒やマデーラを振舞はれた事も再三再四であつた。また普通の者なら疾くの昔に西伯利行きを食つてゐるやうな恐しい行跡を、彼は此の二人に關して幾つも知つてゐたのである。

遊興の席にも二人はしよつちうバラーガを呼び出して、無理矢理に酒を飲ましてジプシィと一緒に踊らせた。彼の手を通つて出て行つた二人の金は、千や二千できかなかつた。二人のご用を務めるためには二十遍くらゐ、命も生皮（いきかは）も犧牲にする程の冒險をして來たし、二人の仕事に加擔して貰つただけの報酬では、追つ付かぬ位澤山の馬を殺しもした。併しそれでも彼は此の二人を愛し、一時間十八露里など、いふ無鐵砲な追ひ方を愛した。辻馬車を顚覆し通行人を轢き殺し、遮二無二莫斯科の町を飛び廻るのが好きであつた。この醉つ拂つた二人の『早くやれ！早くやれ！』といふ野蠻な叫び聲を後ろに聞き乍ら、もうこれより早く駛れないと云ふほど馬を追ふのが好きであつた。それからまた半死半生の體で自分の車を避ける百姓の首筋を、いやといふ程ひ

つぱたくのが好きであつた。「本當の旦那樣だ！」と彼は考へた。

アナトーリとドーロホフも馭者としての彼の腕を愛し、また彼が自分達と同じ事を好む性質を愛した。彼は他の客には遠慮なく金をせびつて、二時間二十五留づゝ要求した。それに他の客の時には餘り自分で出掛けないで、大抵家の若い者を出して遣つた。所が彼の所謂『俺の旦那方』のときには何時も自分で出掛けた上、而も賃金を要求しなかつた。たゞ侍僕から金のある時を嗅ぎ出して、何箇月かに一遍朝の中に素面(しらふ)でやつて來る。そして恭しく腰を屈め乍ら、どうぞお助けを願ひたい、と言ひ出すのであつた。旦那方はいつも彼を椅子に坐らせた。

『旦那樣（若しくは御前樣）どうぞわたくし奴をお助け願ひます。』と彼は言つた。『からつきし馬を失くして了ひましたので、へえ、せめて市場へ買出しに行けるだけでも、お志で宜しうございますから御融通を願ひます。』

で、アナトーリとドーロホフは工面のいゝ時なら、千か二千の金を此の男にくれて遣つた。

バラーガは亞麻色の毛をした、顏の赤い（それ以上頸の方がちつと赤くて太い）、鼻の平つたい、小さい目のぎら〳〵光る、頤鬚のちよんぼりした、年恰好二十七くらゐの頑丈な百姓であつた。彼は絹裏のついた細地の青い上衣を、半外套の上に着込んでゐた。

彼は表の隅（百姓の小屋に於て聖像を安置せる部分）に向つて十字を切り、黑い大きからぬ手を差し伸べながら、ドーロ

ホフに近寄つた。

『旦那樣！』彼は會釋し乍らかう言つた。

『御機嫌よう、兄弟、よく來たな。』

『御機嫌よろしうございます。御前樣。』彼は入り來るアナトーリにかう言つて、同じく手を差し伸した。

『おい、バラーガ、改めて貴樣に聞くが、』とアナトーリは對手の肩に兩手を置きながら、『貴樣は俺を愛してるかどうだ？うむ？今度こそ一つ大役を勤めて貰ひたいんだが……一體どんな馬で來たい？うん？』

『お使の言はれた通り、御前樣のお氣に入りの荒馬でございます。』とバラーガは言つた。

『こら、い、か、バラーガ、馬を死ぬ程ぶつ叩いて、三時間で着くやうにするんだぞ、うむ？』

『死ぬ程ぶつ叩いて了つたら、乘つて行くものが無くなりますよ。』バラーガは目をぱちりとさせてかう言つた。

『くそッ、横つ面はり曲げてくれるぞ、巫山戲るない！』不意に目を剝いてアナトーリは叫んだ。

『何の巫山戲など致しませう。』と馭者は笑ひ乍ら答へた。『一體わたくしが旦那樣方のために、

馬を惜んだ事がございますか？馬の力の有りつたけ駛らしてお目に掛けます。』
『ふむ！』とアナトーリは言つた。『まあ、掛けろ。』
『どうだい、掛けろよ。』とドーロホフも言つた。
『なに立つて居りますで。』
『坐れつてば、下らん事を言はずに飲めよ！』とアナトーリが言つて、マデーラの酒を大きな杯になみ〳〵と注いでやつた。
駁者の眼は酒の方へ向いて光つた。一寸體裁に辭退した後、彼は一息にぐいと飲み乾して、帽の中に藏してあつた赤い絹手巾で口の端を拭いた。
『如何でございます、いつ頃お出掛けになります、御前樣？』
『さうだなあ…（とアナトーリは時計を見て）直ぐ出掛けるさ。い、か、バラーガ、うむ、間に合ふかな？』
『へい出立ち次第でございます。出立ちさへ都合よく參りましたら、間に合はない譯はございません。』とバラーガは言つた。『いつかトゼーリへお伴したときなぞは、七時間で着いたぢやございませんか？御前樣、お覺えがございますか？』
『君知つてるかい、いつか降誕祭へかけてトゼーリからやつて來た事があるんだ。』目を一杯に

睜つて感に堪へたやうに、クラーギンの顏を見詰めてゐるマカーリンの方を振り向いて、追懷の微笑を浮べつゝアナトーリはかう言つた。『マカールカ、君は本當にしまいが、息が窒るくらゐ飛んだぜ。荷橇の長い列の中へ入つたが、一度に二臺づゝくらゐ飛び越したもんだぜ、え？』
『また馬も馬でございました！』とバラーガは物語を續けた。『わたくしは其の時若い側馬を赤につけましたが、』彼はドーロホフに向つて、『旦那樣は本當になさりますまいが、六十露里の道を一息に飛んで行きましたよ。てんで手綱が持てないんですよ、恐しい凍で、手が氷みたいになつて了ひましてね。そこで手綱を抛げ出して、御前樣一つお願しますつてな譯で、わたくしは橇の中へぶつ倒れて了ひました。あれはもう馬を追ふと言ふのぢやございません、向うへ着く迄は留める事が出來ない位でございましたよ。三時間で行き着いて了ひました。而も左の側馬がくたばつただけでございます。』

一七

アナトーリは部屋を出て行つた。幾分かの後銀の帶の附いた外套を身に纏ひ、黑貂の帽子を洒落れて横つちよに冠つて（それが彼の美しい顏によく似合つた）引つ返して來た。姿見の前で一寸樣子を見てから、鏡に向つた時と同じ姿勢でドーロホフの前に立ち乍ら、杯を取り上げた。

『では、フェーヂャ、左樣なら、いろ〳〵と世話になつて有難う、左樣なら！』アナトーリはドーロホフに言つた。『それから……』と彼は一寸考へて、『わが……靑春の親友諸君、左樣なら！』とマカーリン其の他の者に向つてかう言つた。

みんな一緒に出掛ける事になつてゐたにも拘らず、彼は友達をこんな風に呼び掛けて、何かしら人を感動させるやうな、莊重な效果を收めようと思つたらしい。彼は胸を張つて片々の足を振りながら、ゆつくりと大きな聲で語を續けた。

『みんな杯を取つてくれ給へ。バラーガ、貴樣もだぞ。さて我が靑春の親友諸君、我々は隨分長い間一緒に暮して、道樂を盡したものだが、今度はいつ相見る事が出來るだらう？僕はこれから外國へ行つて了ふのだ。長い間一緒に暮して來たが、これで誓くお別れだ。お互に健康を祝さう―萬歲！……』と言つて彼は自分の杯を飲み乾すや、いきなり床へ叩きつけた。

『御機嫌よろしう。』バラーガも同じく自分の杯をぐいと乾して、半巾で口を拭き乍らかう言つた。マカーリンは目に涙を浮べて、アナトーリを抱きしめた。

『あゝ公爵、僕はあなたと別れるのが辛いです。』と彼は言つた。

『さあ、出掛けるんだ、出掛けるんだ！』とアナトーリは叫んだ。

バラーガは部屋を出て行かうとした。

『まあ待てよ、』とアナトーリは言つた。『戸を閉めろ、坐らなくちやいかん。さう〳〵。』

戸は閉められた。一同は座についた。

『さあ、いよ〳〵進軍だ！』アナトーリは立ち上りつゝかう言つた。

侍僕のジョセフはアナトーリに旅囊と劍を渡した。一同は控室へ出た。

『おい、毛皮外套はどこにある？』とドーロホフが言つた。『おい、イグナートカ！マトリョーナ、マトヴェーヴナの所へ行つて外套を貰つて來い、黑貂のマントだ。實は女を連れ出す方法を聞いたんだ。』彼は目をぱちつとさせて、『つまり女は內着のまんま人心地もなしに飛び出すだらう。そこを一寸でも愚圖々々すると、すぐめそ〳〵し出して、お父さんお母さんを始める。さうかうする中に寒くなつて、家へ歸らうと來る――だから君、直ぐ外套の中へ包んで橇へ連れ込むんだぜ。』

侍僕は狐の婦人外套を持つて來た。

『馬鹿、よく言つといたぢやないか――黑貂だよ。おいマトリョーシカ、黑貂のだ！』遠く家中に響き渡るやうな聲で彼は呶鳴つた。

赤い襟卷をつけた、瘠せて色の蒼白い、美しいジプシイの女が、黑貂のマントを手にして馳け出した。黑い目はきら〳〵と輝き、眞黑な髮は鳩羽色の光澤を帶びてうねりを打つてゐる。

『なあに、わたし惜しくないわ、持つてらつしやい。』且那の前へ出て氣おくれのしたやうな、

又マントも惜しいといふやうな風で彼女はかう言つた。

ドーロホフはそれに答へないで外套を取り、マトリーナの肩に掛けてくるりと包んだ。

『ほら、かうするのさ。』とドーロホフは言つた。『それからこんな風にね。』と彼は女の頭の邊まですつかり襟を立てゝ、顔の前だけ一寸開けて置いた。『それからかうするんだぜ、いゝかい？』と彼はアナトーリの首を襟の隙間へ引き寄せた。襟の間からはマトリーナの輝かしい微笑が見えてゐた。

『ぢや、マトリーシャ、左様なら。』アナトーリは彼女に接吻し乍らかう言つた。『あゝ、此の土地で遊ぶのもこれでお終ひだ！スチョーシカに宜しく言つとくれ。ぢや、左様なら！マトリーシャ、あばよ、お前も俺の仕合せを祈つてくれろよ。』

『どうぞ神様、旦那様に澤山仕合せを授けて下さりますやうに。』とマトリーナはジプシィ風の抑揚（アクセント）で言つた。

正面の階段の傍には二臺の三頭立橇（トロイカ）と、二人の屈強な馭者が立つてゐた。バラーガは前の橇に乘つて、高く肘を張りながら悠々と手綱を捌いた。アナトーリとドーロホフは其の方へ乘つた。マカーリンとフヂースチコフと侍僕は今一臺の方へ乘り込んだ。

『よしかな？』とバラーガは訊いた。

『やれッ！』手にぐる〳〵と手綱を巻き乍ら彼は喚（わめ）いた。と、橇はニキーツキィ並木街をまつしぐらに疾走し始めた。

『しつ、走れ、こん畜生！……しつ……』バラーガと馭者臺に坐つてゐる若い者の、かう叫ぶ聲が聞えるのであつた。アルバートの廣場で橇は箱馬車に一寸觸つた。何やらめり〳〵といふ音がして、人の呶鳴る聲が聞えたが、橇はその儘アルバートを飛んで行つた。

ボドノギンスキィ街を往復してから、バラーガは手綱を引き締め始めた。そしてまた元へ引つ返すと、彼は古廐（スターラヤコニューシエンナヤ）街の四つ角で馬を止めた。

若い者は飛び下りて馬の轡を取つた。アナトーリはドーロホフと共に歩道を進んで行つた。門に近寄ると、ドーロホフは口笛を鳴した。また別な口笛がそれに答へたが、引き續いて小間使が走り出した。

『庭の中へお入り下さいまし、でないと目に立ちますから。直ぐお出になります。』と彼女は言つた。

ドーロホフは門の傍で待つてゐた。アナトーリは小間使について庭へ入つた。そして家の角を曲つて入口の階段へ馳け上つた。

マリヤ・ドミートリエヴナの外出の供をする、ガヴリーラといふ大男がアナトーリを出迎へた。

『奥さんの所へおいでを願ひます。』と戸口の道を塞ぎながら、彼はだみ聲でかう言つた。
『一體どこの奥さんだい？そして貴樣は何者だ？』とアナトーリは息切れのする聲で喘いた。
『おいで下さりまし、御案内しろと言ふ仰しやりつけでございます。』
『クラーギン！歸れ！』とドーロホフが叫んだ。『裏切りだ！歸れ！』
耳門の傍に立つて居たドーロホフは、アナトーリの入つた後の門をしめようとする、門番を對手に爭つてゐるのであつた。ドーロホフは最後の力を奮つて門番を突き飛ばし、駈け出して來たアナトーリの手を摑んで、耳門の外へしよびき出すと、そのまゝ橋の方へ一散に引つ返した。

一八

マリヤ・ドミートリエヴナは、廊下で泣きくづれてゐるソーニャを見附けて、何もかもすつかり白狀させて了つた。ナターシャの手紙を横取りして目を通すと、其の手紙を持つてナターシャの部屋へ入つた。
『穢らはしい、恥知らず！』と彼女は叫んだ。『なんにも聞きたくない！』
吃驚したやうな、乾いた目で自分を眺めてゐるナターシャを突き飛ばすなり、彼女は錠を下して閉ぢ込めて了つた。そして門番には、今夜來る人達を門の中へ入れて出さないやうに、侍僕には

其の人達を自分の所へ通すやうに吩咐けると、彼女は客間に坐つて掠奪者を待ち設けてゐた。
ガヴリーラがやつて來て曲者が逃亡した事を告げると、アフロシーモヴは顔をしかめて立ち上り、手を後ろに組んで何うしたものかと考へ乍ら、長いこと部屋々々を歩き廻つてゐた。十一時すぎてから、彼女は衣嚢の中で鍵をさぐりつゝ、ナターシャの部屋へ赴いた。ソーニャはしやくり上げながら廊下に坐つてゐた。
『マリヤ・ドミートリエヴナ、どうかわたしを入れて下さい、後生ですから！』と彼女は言つた。
アフロシーモヴはそれに答へないで、戸を開けて中へ入つた。「穢らはしい、忌々しい……しとの家で……恥しらず、小娘のくせに……たゞ氣の毒なのは父親だ！」忿懣の情を晴らさうと努め乍ら、彼女はかう考へた。「隨分むづかしい事だが、これはどうしても皆の口止めをして、伯爵に隱さなきやならない。」マリヤ・ドミートリエヴナは斷乎たる足取りで部屋へ入つた。ナターシャは兩手で頭を包むやうにして、長椅子に横たはつたまゝ、身動きもしなかつた。彼女は先程女主人が出て行つた時と同じ姿勢であつた。
『い、子です、本當にい、子ですよ！』とマリヤ・ドミートリエヴナが言つた。『人の家で情夫に媾曳の時刻を決めるなんて！何も氣取る事は少しもありません。お前さん人が物を言つてる時には、じつと聞いてるもんですよ。』と彼女は對手の腕をつゝついた。『人が物を言つてる時には、

じつと聞いてるもんですよ。お前さんは思ひ切り下等な小娘のやうな眞似をして、自分の顔に泥を塗つたんですよ。わたしもお前さんだけなら、どんな事でも仕兼ねまじいんだけれど、只お父さんが可哀さうだから、内密にして置きます。』

ナターシャは位置を變へなかつたが、音に立てぬ痙攣的な啜り泣きに息を窒められて、體をぴくり〳〵と波立たせ始めた。マリヤ・ドミートリエヴナはソーニャの方を振り返つて、ナターシャの傍らなる長椅子に腰を下した。

『あの男はわたしの手を逃れて飛んだ仕合せだつた。けれどわたしは彼奴を探し出さずには置かないから。』と彼女は持前の粗い聲で言つた。『これ、お前さんはわたしの言ふ事を聞いてるんですか?』

彼女は大きな手をナターシャの顔の下へ差し入れて、自分の方へ捩ぢ向けたと、アフロシーモワもソーニャも其の顔を見てびつくりした。目は乾いてぎら〳〵と輝き、脣はきりつと咬みしめられて、頰はげつそり落ち込んでゐた。

『打つちやつて……下さい……一體わたしに取つて……わたし……死んぢまふわ……』意地悪く力を籠めて、アフロシーモワの手を振り放し乍らかう言つた彼女は、其のまゝ元の位置へ打ち倒れた。

『ナタリー!……』とマリヤ・ドミートリエヴナは言つた。『わたしはお前さんのためよかれと思つてるんですよ。まあ、さうして寢ておいで、寢ておいで、わたしは手を出さないから。さうして聞いておいで……わたしはお前さんの間違つてる事は言ひますまい。お前さん自分で知つてるだらうから。ところでさ!お前さんのお父さんは明日歸つて來るんですよ——一體わたしはお父さんに何と言つたらいゝの?え?』

再びナターシャの體はすゝり泣きのために戰いた。

『え、お父さんが此の事を知つたら——兄さんや許婚の良人が聞いたら!』

『わたしには良人なんかありません、わたし斷りました。』とナターシャが叫んだ。

『同じことです。』とマリヤ・ドミートリエヴナは語を次いだ。『兎に角みんなが此の事を知る、その時皆がその儘うつちやつて置くと思ひますか?もしあの人が——お父さんの性質はわたしも知つてるますが……もしお父さんがあの男に決鬪でも申し込んだらどうします、それでもいゝの?え?』

『あゝ、うつちやつといて頂戴、なんだつてあなたは邪魔をしたんです? なぜです? なぜです? 誰があなたに頼みました?』ナターシャは長椅子の上に身を起して、憎々しげに對手を見遣りながらかう叫んだ。

『そんなら一體お前さんはどうして欲しかつたの？』とアフロシーモヴは再び熱くなつて叫んだ。『一體お前さんは座敷牢にでも入つて居たいのかえ？誰があの男にうちの出入りを留めたんだらう？何のためにお前さんを、まるでジプシィ女か何ぞのやうに誘拐す必要があつたの？よしまんまと誘拐し了せたとしても、お前さんは何時迄も見附からないと思ふの？お父さんもあり、兄さんもあり、お婿さんにならうといふ人も有るぢやないの？あの男は恥しらずです、やくざ者です、それつきりですよ！』

『あの人はあなた方の誰よりも立派な人ですわ！』半ば身を起しつゝナターシャはかう叫んだ。『若しあなた方が邪魔をしなかつたら……あゝ何といふこつたらう、何といふこつたらう！ソーニャ、あんたは何のために？あゝ、もう出て頂戴！……』

自分自身が悲哀の原因だと感じた時にのみ、人が示すやうな深い〳〵絶望の色を浮べて、彼女は慟哭し始めた。アフロシーモヴは再び話し掛けようとしたが、ナターシャは、『出て頂戴、出て頂戴！あなた方はみんなでわたしを憎むんです、馬鹿にするんです！』と叫んで、又もや長椅子に身を抛げ出した。

マリヤ・ドミートリエヴナは又暫くの間、引き續いてナターシャを說き諭し、此の事は必ず伯爵に隱さなくちやならない、若しナターシャが努めて一切の事を忘れ、誰の前へ出ても、何か有つ

たやうな素振さへ見せなかつたら、誰一人知るものはないのだから、と言ひ聞かせた。ナターシャは返事しなかつた。もう泣きもしなかつたが、惡感と身慄がついて來た。マリヤ・ドミートリエヴナは彼女に枕を當てがつて、二枚の夜具で體を包み、自分で菩提樹の花を煎じて持つて來てやつた。併しナターシャは彼女の呼ぶ聲に應へなかつた。

『まあ、寢さしとかう。』マリヤ・ドミートリエヴナは彼女が眠つてゐるのだと思つて、部屋を出て行きながらかう言つた。

併しナターシャは眠つてゐなかつた。蒼褪めた顏に据わつて動かぬ目を見開いたまゝ、前の方を眞直に見詰めてゐた。夜つぴてナターシャは寢もしなければ泣きもせず、幾度も起き出して傍へ寄つて來るソーニャと話もしなかつた。

老伯爵は翌日朝食前、約束通り莫斯科在から歸つて來た。彼は恐しく機嫌がよかつた。買手との話も巧く纏つたから、もう莫斯科で彼を引き止めるものも無ければ、懷しい夫人との再會を妨げるものも無かつた。アフロシーモヴは彼を出迎へて、ナターシャが昨日大層惡かつたので、醫者を呼びに遣つたりなどしたが、もう今では大分よくなつたと言つた。ナターシャはこの朝居間から出て來なかつた。干割れた脣を咬みしめて、乾いた目を据ゑたまゝ窓の傍に坐つて、往來を通る人々を不安げに見透したり、部屋へ入つて來る人をあわてゝ振り返つたりした。彼女は明らか

に男の消息を待ち焦れて、男が自分でやつてくるか、さなくば手紙を寄越すかと、當てにしてゐるのであつた。

伯爵が入つて來た時、彼女は男の足音を聞き付けて不安げに振り向いた。と、忽ちその顔は以前の冷たい、寧ろ憎々しげな表情に歸つた。彼女は出迎へに立ち上らうとさへしなかつた。

『お前どうしたんだい、ナターシャ、病氣なのかい？』と伯爵は訊いた。

ナターシャは一寸默つてゐたが、

『え、、病氣なの。』と答へた。

何故そんなに悄氣てゐるのか、何か許婚に變事があつたのではないか、といふ伯爵の心配さうな問に對して、何でもないから心配しないでくれと、彼女は賴んだ。マリヤ・ドミートリエヴナも、何事も起らなかつたといふ、ナターシャの言葉を確かめた。伯爵は娘の疑はしい病氣や、取り亂した樣子や、ソーニャと女主人の當惑らしい顏附に依つて、自分の留守中何か出來たに相違ない、と明らかに見て取つた。けれど自分の愛し子の身の上に何か忌はしい事があつたとは、考へるさへ恐しい事であつた。彼は心から自分の樂しい無事平穩の生活を愛してゐたので、いろんなことを根掘り葉掘りするのを避け、何も特にこれといふ程の事は無かつたのだらうと、自分で自分を信じさせようと努めた。そしてたゞ娘の病氣で出發が延びるのを辛がつてゐた。

一九

妻が莫斯科へ到着した日から、ピエールは只々彼女と暮したくないばかりに、どこかへ旅行しようと考へてゐた。ロストフ一家が莫斯科へ出て來てから間も無く、ナターシャの彼に與へた印象は、更に此の計畫の實行を急がせた。彼はトゼーリなるバズヂェーフの未亡人の許をさして出發した。この女はずつと以前から、彼に故人の書類を讓る約束をしてゐたのである。

莫斯科へ歸つたとき、ピエールはマリヤ・ドミートリエヴナの手紙を受け取つた。それにはボルコンスキイと其の未來の妻に關して、至極重大な事件を相談したいから、直ぐ自分の所へ來てくれとあつた。ピエールはナターシャを避けてゐた。それは既婚の男が親友の許嫁に對して、當然抱くべきものよりもつと强烈な感情を、此の娘に對して抱いてゐるやうに思はれたからである。それにも拘らず、一種の運命が常に彼をナターシャに結び附けようとしてゐた。

「一體何事が起つたんだらう？そして俺に何用があるのかしら？」マリヤの許を訪れるべく着換しながら、彼はかう考へた。「早くアンドレイ公爵が歸つて來て、あの人と結婚して了へばいゝのに。」彼はアフロシーモヴの家へ行く道々かう思つた。

トゼーリ並木道で誰か彼を呼び掛けるものがあつた。

『ピエール！君もう前に歸つたのかい？』と聞き馴れた聲が叫んだ。ピエールは首を上げた。二頭の灰色の逸物をつけた橇に、いつも離れる事のない親友マカーリンと一緒に乘つて通る、アナトーリの姿がちらと目に入つた。馬は後足で橇の鼻に雪を蹴上げてゐた。アナトーリは時代めいたはいからな軍人の姿勢で、顔の下半分を海狸の襟でくるみ、首を少し傾げ乍ら眞直に坐つてゐる。其の顔はぽつと紅が潮して、横つちよに冠つた白い羽毛つきの帽子の下からは、粉雪のかゝつた油に光る捲毛が覗いてゐる。

「いや、全くこれが本當の賢人だ！」とピエールは考へた。「刹那の快樂より外には何も見ず、何に對しても不安を感じる事もない。それだから何時も快活で、滿足さうに落ち着き拂つてゐる。俺があんな風になれたら、どんな代價でも拂ふんだがなあ！」ピエールは羨望の念を以てかう考へた。

アフロシーモヴ家の控室で、侍僕はピエールの外套を脱がせながら、女主人が寢室へ招じて居る旨を告げた。

廣間へ通ずる戸を明けた途端ピエールは、癪せた蒼白い意地惡げな顔をして、窓の傍に坐つて居るナターシャを見た。彼女はピエールを振り返ると眉をひそめて、冷やかな氣取つた表情を浮べつつ部屋を出て了つた。

『何事が起つたんですか？』マリヤ・ドミートリエヴナの部屋へ入るとピエールはかう訊いた。

『結構な事ですよ。』とマリヤが答へた。『五十八年間この世に暮して來たけれど、こんな穢らはしい事は今まで見たことがありません。』

マリヤ・ドミートリエヴナはこれから話す事に就いて、絶對の祕密を守るといふ誓をピエールに立てさせた後、ナターシャが兩親に斷りもなく許婚の良人を拒絶した事、その原因はピエールの妻が取り持つたアナトーリだといふ事、彼女が祕密にこの男と結婚するため、父の不在に乘じて駈落しようとした事などを知らせた。

ピエールは自分の耳を信じる事が出來ないで、肩をすくめ口を開けた儘、彼女の話を聞いてゐた。あれほど烈しく戀されてゐたアンドレイの許婚の妻が——曾てはあれほど可憐であつたナターシャ・ロストーヴが、もう妻のある（彼は義兄の結婚の祕密を知つてゐたので）馬鹿者のアナトーリにボルコンスキイを見換へたばかりか、駈落を承知する迄に迷つて了つたとは、到底了解し想像し得る所でなかつた。

子供の時から知つてゐるナターシャの可憐な印象と、彼女の下賤と愚劣と慘忍に關する想念は、ピエールの心の中で融合することが出來なかつた。彼は自分の妻の事を想ひ出した。

「女つてものは皆こんな風なんだ。」穢らはしい女に結び附けられた悲慘な運命は、敢て自分一

人のものではないと考へ乍ら、彼は心の中でかう獨り言ちた。併しそれでもアンドレイ公爵が涙のこぼれる程氣の毒であつた。其の男性の誇りが可哀さうであつた。友の身を氣の毒と思へば思ふ程、先程廣間で冷やかな氣取つた表情をして、自分の傍を通り過ぎたナターシャの事が、いよいよ烈しい輕侮――といふより寧ろ嫌惡の念と共に思ひ浮べられた。併しナターシャの心は絶望と慚愧と自卑に充されてゐたので、その顔が偶然落ちついた品位と、いかめしい表情を帶びてゐただけで、それは彼女の關知する所でないといふ事を、ピエールは思ひ及ばなかつたのである。

『併しどうして結婚するのです？』ピエールはアフロシーモヴの言葉を聞き咎めてかう言つた。『あの男は結婚なんてする譯に行きません。もう妻のある身ですもの。』

『さあ、益々大變な事になつて來た。』とマリヤ・ドミートリエヴナは言つた。『立派な坊つちやんだ！正直正銘の畜生だ！所が、あの娘は待ち焦れてるんですよ。もう昨日から待ち焦れてるんですよ。早速知らせてやらなくちやならない、そしたら當てにだけでもしなくなるだらうから。』

ピエールからアナトーリの結婚事情を委しく聞いて、此の男に對する罵言の言葉で僅かに鬱憤を晴らした上、彼女はピエールを呼んだ譯を話した。何時この地へ歸つて來るか分らないアンドレイ公爵や老伯爵が、彼女の祕密にしようと思つてゐる此の事件を嗅ぎ附けて、クラーギンに決鬪を申し込むやうな事はなからうか、それをマリヤ・ドミートリエヴナは心配してゐたのである。

彼女はピエールに向つて、自分の命令としてアナトーリに莫斯科を退去させ、二度と目の前へ顔を出させないやうにしてくれと賴んだ。始めて老伯爵や、ニコライや、アンドレイ公爵に迫つてゐる危險を悟つたピエールは、彼女の希望を實行すると約束した。アフロシーモヴは簡單正確に自分の要求を陳べた後、やつと彼を客間へ出して遣つた。

『い、ですか、伯爵は何にも知らないんですからね。お前さん何にも知らないやうな振をなさい。』と彼女は言つた。『所で、わたしはあの娘の所へ行つて、當てにする事はないと敎へてやりませう。何なら家で食事をして行きなさい。』とピエールに向いてかう叫んだ。

ピエールは老伯爵に行き會つた。彼は當惑して取り亂した風であつた。それはナターシャがボルコンスキイに破談を申し込んだ事を、『今朝父に打ち明けたからである。

『困つた、mon cher、本當に困りましたよ。』彼はピエールにかう言つた。『母親のついてない娘は全く困つたものですよ。わたしは本當に此處へ來たのを後悔してゐます。あなただからあけすけにお話します。お聞きでもありませうが、あれは誰にも何とも相談しないで、あの話を斷つて了つたんですよ。實の所、わたしも此の緣談が大して好もしくなかつたのです。勿論當人は立派な人ですがね、併しお父さんの心に背いちや碌な事はありません。それにナターシャも、外に望み手が無い譯ぢやありませんからね。併しそれにしても、あんなに長い間待つてゐたものを、兩

親にも相談なしに、こんな思ひ切つた事を仕出來すなんて！あれは今加減が悪いのです。いやはや、何が何だか分りやしません。全く母親の附いてない娘の子は、仕樣のないものですなあ、伯爵、いや全くです……』

ピエールは老伯爵が非常に取り亂してるのを見て、話題を他へ轉じようと努めたが、伯爵はともすれば自分の悲しみに戻り勝であつた。

ソーニャが心配さうな顏をして客間へ入つて來た。

『ナターシャは氣分が勝れませんの、今自分の部屋に居りますが、彼方でお目に掛りたいと申してゐます。マリヤ・ドミートリエヴナも彼方です。そして矢張りあなたのお目に掛りたいと仰しやいますが。』

『あゝさう、あなたはボルコンスキィと大層仲善くしてゐらつしやるから、屹度何か言づけでも有るんでせう。』と老伯爵は言つた。『あゝ、堪らない、堪らない、何もかも巧く行つてたのにな あ！』

殘り少になつた兩鬢の白髮を摑んで、伯爵は部屋を出て行つた。

アフロシーモヴはアナトーリが有妻の身だといふ事をナターシャに告げた。ナターシャはそれを本當にしないで、當人のピエールからその確證を要求したのである。ソーニャは暗い廊下傳ひにナ

ターシャの居間へ案内しながら、此の事をピエールに知らせた。

ナターシャは蒼ざめた嚴つい顏をして、マリヤ・ドミートリエヴナの傍に立つてゐたが、ピエールが戸口に現れると直ぐ、熱病やみのやうに輝く、物訊きたげな目附で彼を迎へた。彼女はにこりともしなければ、點頭いて見せようともしないで、只じつと彼を見詰めて居た。其の目はたゞ一つ、彼がアナトーリ問題に關して自分の味方であるか、それとも他の人達と同じく敵であるか、それだけが訊きたげな風であつた。ピエール自身の存在は明らかに認められてゐなかつた。

『此の人はすつかり知つてゐます。』マリヤ・ドミートリエヴナは彼を指さしつゝ、ナターシャに向つてかう言つた。『わたしの言つた事が本當かどうか、あの人に聞かして貰ひなさい。』

彈丸を受けて追ひ詰められた獸が、近寄つて來る獵師や犬を眺めるやうに、ナターシャは二人の顏を交るゞ見較べて居た。

『ナターリヤ・イリーニシナ、』ピエールは此の娘に對する憐憫と、これからしなくてはならない荒療治に對する嫌惡の情を感じつゝ、伏目になつてかう言ひ出した。『それは本當だらうと嘘だらうと、あなたに取つて同じ事だと信じます、なぜつて……』

『それぢや、あの人に奧さんがあると云ふのは嘘なんですね？』

『いゝえ、それは本當です。』

『ぢや、あの人は奥さんが有つたんですか、ずつと以前から?』と彼女は訊いた。『誓つて?』

ピエールは彼女に誓つた。

『あの人は未だこゝにゐますか?』彼女は早口に訊いた。

『えゝ、僕たつた今會ひました。』

彼女はもう口を利く力も無いらしく、出て行けといふやうに手で仕方をした。

二〇

ピエールは食事に殘らないで、部屋を出ると直ぐ辭し去つた。彼はアナトーリを探しに市中を乘り廻した。今は此の男の事を考へると、全身の血が心臟へ押し寄せて、息をつぐのさへ困難に感じられた。ジプシィのところにも、山の上にも、コモネオにも彼は居なかつた。ピエールは倶樂部へ出掛けた。倶樂部ではすべてがいつも決りの順序で進行してゐた。食事に集つた連中が幾組にも分れて座を占め乍ら、ピエールに挨拶をして市中の出來事を話し始めた。給仕は彼の馴染や習慣を知つてゐるので、挨拶を濟すとすぐ、あなた樣の席は小食堂に取つてあります、そしてN公爵は圖書室で、T樣は未だお見えになりませんなど、報告した。ピエールの知人の一人が時候の挨拶の間に、今市中でやかましいクラーギンのナタリヤ誘拐の噂を聞いたが、あれは本當な

のかと訊ねた。ピエールは笑ひながら、それは出鱈目だ、たつた今ロストフを訪ねたばかりだ、と答へた。彼は人毎にアナトーリの事を訊ねたが、あるものは今日未だ來ないと言ふし、又或るものは食事に來ると言つた。

今自分の心の中が何んなになつてゐるか知らないで、落ち着き拂つた冷淡な人々の群を見てゐると、ピエールは變な氣持になつた。彼は皆の集るのを待ち乍ら、廣間を歩き廻つてゐたが、アナトーリが來るのを待ち草臥れて、食事もしないで家へ歸つた。

彼の探ねあぐんだアナトーリは、此の日ドーロホフの所で食事をして、一緒に善後策を講じたのである。彼はどうしてもナターシャに逢はねばならぬやうに思はれた。夕方彼はこの媾曳の方法を講じるために、妹の所へ出掛けた。ピエールが莫斯科ぢう走り廻つて、空しく家へ歸つた時、侍僕はアナトーリが夫人の部屋にゐる由を知らせた。夫人の客間は客で一杯であつた。

ピエールは着京以來、一度も會はないでゐる妻に挨拶もしないで（この時彼はいつにも增して妻が憎かつた）、客間へ入つた。そしてアナトーリを見附けると、いきなり其の傍へ寄つた。

『あゝ、ピエール、』夫人はかう言ひながら良人に近附いた。『うちのアナトーリがどんな有樣でゐるか、あなた御存じないでせう……』

と言ひ掛けて彼女は口を噤んだ。低く垂れた良人の首や、其のぎら〳〵輝く目や、斷乎たる足

取りの中に、嘗てドーロホフとの決鬪後エレンが經驗した事のある、狂憤と力との恐しい表情が窺はれたからである。

『お前のゐる所には、必ず墮落と罪惡がついて廻るんだ。』とピエールは妻に言つた。『アナトーリ、あつちへ行きませう。僕は一寸君に話したいことがあるんです。』かう佛蘭西語で言つた。

アナトーリは一寸妹の方を振り向いて、早速ピエールの後からついて行きさうな素直な樣子で、從順しく立ち上つた。ピエールは其の手を取つてぐん〳〵しよ引きながら、部屋を出て行つた。

『Si vous vous permettez dans mon salon (若しあなたがわたしの客間で失禮な事を)……』とエレンは小聲で言ひ掛けたが、ピエールはそれに答へないで出て了つた。

アナトーリはいつもの元氣のいゝ、氣取つた足取でついて來たが、其の顏には不安の色がありありと見えてゐた。

自分の書齋へ入ると、ピエールは戸を閉めて、對手の顏を見ないやうにしながら言ひ出した。

『君はロストーヴ伯爵令孃に結婚の約束をしましたか、そして一緒に駈落しようと思つてたのですか？』

『mon cher（モン シエル）』とアナトーリは佛蘭西語で答へた（以下の會話もずつとそれで續いたので）。『僕はそんな調子で發しられた問に對して、返答の義務を有してゐないです。』

前から蒼ざめてゐたピエールの顏は、狂憤のために歪んで來た。彼はその大きな手でアナトーリの軍服の襟を掴み、其の顏が充分慴えた表情を呈するまで、右左へと振り廻すのであつた。

『僕が君と話す必要があると言つたら……』とピエールは繰り返した。

『まあ、一體なんのこつてす、馬鹿々々しい。え？』羅紗と一緒にちぎれた襟の釦を探りながら、アナトーリはかう言つた。

『君はやくざ者の人非人だ、僕はこ……こいつで君の頭を叩きつぶす樂しみを、どうして怠えてゐられるかと思つて、自分ながら不思議な位だ。』とピエールは言つた。彼に上手な言廻しが出來たのは、佛蘭西語で話したせゐである。

彼は重い文鎭を手に取つて、威嚇するやうに振り上げたが、また直ぐ忙しげに元の場所へ置いた。

『君はあの人に結婚の約束をしたんですか？』

『僕は、僕は、僕は考へてもゐなかつた。尤も、僕は決して約束なんかしません、なぜつて……』

ピエールはそれを遮つた。

『君はあの人の手紙を持つてますか？　手紙がありますか？』アナトーリの方へ詰め寄りながら、彼はかう繰り返した。

アナトーリはじつと其の顔を見ると、直ぐに衣嚢へ手を突つ込んで、紙入を取り出した。

ピエールは差し出された手紙を受け取ると、途中に立つてゐる卓を突き飛ばし乍ら、長椅子の上にどうと倒れた。

『Je ne serai pas violent, ne craignez rien（心配なさんな、僕は腕力なんか用ひないから。）』對手の慴えた身振に對して、ピエールはかう言つた。

『手紙――これが一つと……』自分に與へられた課目を繰り返すやうに彼はかう言つた。『それから第二には、』束の間の沈默の後、再び立ち上つて歩き廻りながら語を次いだ。『君は明日莫斯科を去らなくちやなりませんよ。』

『併しどうして僕にそんな事が……』

『第三は、』對手の言葉に耳を假さないで、ピエールは續けた。『君とあの人の間にあつた事は、決して誰にも言つちやなりませんぞ　此の事は全然君に禁じる譯に行かない、そりやあ僕だつて知つてるが、併し、もし君に良心の閃きでもあるならば……』ピエールは幾度か無言のまゝ部屋の中を歩き廻つた。

アナトーリは彼の傍に坐つて脣を咬んでゐた。

『君だつて、もういゝ加減分りさうなものぢやありませんか。君一箇の快樂の外に、他人の幸

福や平和もあるんですからね。君は自分の快樂のために、人の一生を臺なしにしてゐるんだ。女と巫山戯たいなら、僕の家内みたいなのを對手にし給へ。あんな連中の對手なら、君は當然の權利を行使すると言ふものだ。彼等は同じやうな墮落の經驗を以て、君に對して武裝してかゝるからねえ。併し處女を捕へて結婚の約束をしたり……騙して盗み出したりするなんて……それは老人や子供を打つのと同じ卑劣な仕業だつて事が、どうして君に分らないのです！……』

ピエールは口を噤んでアナトーリを眺めた。その目附はもう腹立たしいと言ふより、不思議さうであつた。

『そんな事は知りませんよ、え？』ピーエルが怒りを鎭めるにつれて、アナトーリは次第に元氣附き乍らかう言つた。『そんな事は知りません、そして知りたくもないです。』彼はピエールの方を見ないで輕く下顎を顫はせつゝかう言つた。『併し、君は僕に對して卑劣だとか何とか言ひましたね。僕は Comme un homme d'honeur（一箇の潔白な人間として）そんな言葉を許す譯に行きません。』

ピエールは吃驚して對手を眺めた。彼が何を要求するのか分らなかつたのである。

『もつとも二人きり差向ひの席ではありましたが、』とアナトーリは語を次いだ。『僕はどうしても……』

『どう云ふんです、滿足の要求ですか？』とピエールは冷笑的に言つた。

『少くとも、君は自分の言つた事を取り消す事が出來ますよ、え？若し君がその希望を容れて欲しければですよ、え？』

『取り消します、取り消しますとも、』とピエールは言つた。『そして僕はお詫しますよ。』彼と我ともなしに對手の千切れた釦を見詰めた。『そして若し旅費が入用なら金も・・・』

アナトーリは微笑した。妻の顔で見馴れてゐる此の臆病で卑劣な微笑が、ピエールの癇癪玉を破裂さして了つた。

『えゝ、情ない人非人の一統だなあ！』と言つて彼はぷいと部屋を出た。

翌日アナトーリは彼得堡（ペテルブルグ）へ向けて出發した。

二

ピエールはアフロシーモヴの希望――クラーギンの莫斯科追放を實行した事を知らせるため、彼女の許へ赴いた。すると家中はすつかり恐怖と動搖に充されてゐた。ナターシャが大變惡いとの事である。マリヤ・ドミートリエヴナの内緒で話した所に依ると、彼女はアナトーリが有妻の身だといふ事を聞いた夜、そつと砒素を手に入れて自殺を企てたのである。併し少しばかり呑んだ時酷く懼えて、ソーニャを起して有りの儘打ち明けた。幸ひ解毒の方法が間に合つたので、彼女は

もう命に別條はなくなつた。併しそれでも衰弱が甚しくて、田舍へ歸ることなどは思ひも寄らないので、母夫人を呼びに使を出した。

ピエールは途方に暮れた老伯爵と、目を泣き腫したソーニャを見たばかりで、ナターシャに會ふ事が出來なかつた。

此の日ピエールは倶樂部で食事をした。そこでもこゝでもロストーヴ掠奪の試みに關する噂で持ち切りであつた。彼は頑强に此の噂を否定して、自分の義兄がロストーヴに結婚を申し込んで斷られた外、何事もなかつたのだと皆に說明した。ピエールは此の事件をすつかり揉み潰して、ロストーヴの評判を回復するのが、自分の義務のやうに感じられた。

彼はアンドレイ公爵の歸國を戰々競々として待つてゐた。そして毎日老公爵の許へ樣子を聞きに行つた。

老公爵はブリエンヌを通じて、市中に行はれてゐる噂をすつかり知つてゐたし、ナターシャのマリヤ孃に送つた破約狀も讀んだ。彼はいつもより快活らしい樣子で、前より餘計に息子の歸來を待ち兼ねて居た。

アナトーリの出發後二三日經つて、ピエールはアンドレイ公爵から、歸朝を知らせかたゞ、來遊を乞ふといふ手紙を受け取つた。

アンドレイ公爵は莫斯科へ着くや否や、第一番に父の手から、ナターシャが妹へ送つた破約狀を受け取つた(この手紙はブリエンヌがマリヤの手許から盜み出して、老公爵に渡したのである)。そしてナターシャ掠奪に關する物語を、いろんなおまけ迄つけて父に聞かされた。

アンドレイ公爵が着いたのは前の晩であつた。ピエールは翌朝彼を訪問した。友がナターシャと同じやうな狀態に陷つてる事と期待してゐたピエールは、客間へ入らうとするとき、書齋から洩れて來るアンドレイ公爵の甲高い聲を聞いて、一驚を喫した。彼は活き〳〵した調子で、何か彼(ペテ)得堡(ルブルグ)の祕密事件といつたやうな話をしてゐた。老公爵と今一人誰かの聲が、時々その話を遮るのであつた。マリヤがピエールを出迎へた。彼女は兄のゐる部屋の戸口を目で敎へ乍ら、兄の悲しみに同情を表するらしく、ほつと吐息をついた。併し彼女が今度の出來事にも、兄が許嫁の變心の報に接した態度にも、非常な滿足を感じてゐるのは、その顏附から推してピエールにも分つた。

『兄はこれを覺悟してゐたと申しますの。』と彼女は言つた。『尤も兄の誇りが正直な感情の表白を許さないつて事は、わたしも承知してゐます。けれど、それにしてもわたしの期待以上に、ずつと以上に兄はこの出來事を忍んでゐます。何うもあゝなるべき約束だつたと見えますねえ…』

『併し何もかもすつかりお終ひなのですか?』とピエールは訊いた。

マリヤは吃驚したやうに彼を眺めた。どうしてそんな事か訊けるのかと不思議に思つたらしい。

ピエールは書齋へ入つた。アンドレイ公爵は非常に面變りしたが、見受けるところ、ずつと健康に向つたらしい。けれど眉と眉との間に新しく縱皺が出來てゐた。彼は文官服を着て、父公爵とメシチェールスキイ公爵の前に立つた儘、元氣のい、身振をしながら熱心に議論してゐた。話題はスペランスキイに關するものであつた。彼の流刑と實(まこと)らしからぬ謀叛に關する報知は、ごく最近莫斯科へ傳へられたのである。

『今あの人(スペランスキイ)の事を彼これ非難してゐるのは、つい一月前まであの人に隨喜渴仰してゐた連中と、』とアンドレイは言つた。『あの人の志を理解する力の無かつた連中です。失意の人を非難して、他人の過失まで塗り附けるのは易(やさ)しい事ですよ。併しわたしは敢て斷言しますが、若し今の御治世に何かい、事が行はれたとすれば、そのい、事はあの人に依つて——只々あの人一人に依つてなされたのです…』

彼はピールを見附けると話を止めた。其の顏はぴくりと慄へたが、直ぐまた毒のある表情を浮べた。

『そして後代あの人を尊敬するに至るだらうと思ひますね。』と言ふだけの事を言つて了ふと、彼は直ぐピエールの方へ向いた。

『やあ、君どうだね? 相變らず肥えてるね。』彼は活き〳〵と聲を掛けたが、併し新たに出來た

皺は、更に深く其の額へ食ひ込んだ。『あ、僕は丈夫だよ。』ピエールの問にかう答へて、彼はにたりと笑つた。

ピエールは此の薄笑ひが、「僕は丈夫だ、併しその健康も今は誰にも必要がないのだ。」と言つたのを明らかに悟つた。

ピエールを對手に波蘭境から此方が恐しく道の悪い事や、瑞西でピエールの知人と出會つた事や、今度子供の教育のため外國から連れて來た、家庭教師のデサール氏の事など二こと三こと話した後、アンドレイ公爵は二人の老人の間に續いてゐる、スペランスキイ論へ又もや熱心に口を容れた。

『若し本當に謀叛の事實があるなら――ナポレオンと内通の證據があるなら、立派に天下へ發表したらいゝぢやありませんか。』彼は熱してせか〳〵と言つた。『僕は個人としてスペランスキイを好まないし、また以前とても好まなかつたですが、併し僕は正義を愛します。』

ピエールは知り過ぎるくらゐ知つてゐる友の性癖――堪らないほど苦しい心内の想念を揉み消すため、自分に取つて縁もない問題を論じたり、興奮したりする内部の要求に氣が付いた。

メシチェールスキイ公爵が去つたとき、アンドレイ公爵はピエールの腕を小脇にかゝへ込んで、自分のために當てられた部屋へ招いた。部屋の中には寢臺がちやんと準備してあつた。そして荷

造を解いた鞄や箱がごろごろしてゐた。アンドレイ公爵は其の一つに近寄つて手箱を取り出した。手箱の中から彼は紙にくるんだ何かの束を引き出した。これだけの事を彼は無言のまゝ手早くして了つた。やがて彼は立ち上つて咳拂をした。その顔は妙にしかめられ、唇はきりつとしまつて居た。

『若し君迷惑だつたら許してくれ給へ……』

友がナターシャの事を言はうとしてゐるのは、ピエールにも直ぐ分つた。その幅の廣い顔は哀惜と同情の色を表した。此の顔の表情がアンドレイ公爵をいら〳〵させた。彼はきつぱりして凛と響く、而も不快な聲で言葉を續けた。

『僕はロストーヴ令孃から拒絶を受けたんだ。そして君の義兄があの人に結婚を申し込んだとか、若しくはそれに類した噂が僕の耳に入つた。それは一體本當かね？』

『本當でもあり、本當でもなしだ。』とピエールは言ひ掛けたが、アンドレイ公爵はそれを遮つた。

『こゝにあの人の手紙と寫眞があるからね。』

彼は卓から束ねたものを取つて、ピエールに渡した。

『これを伯爵令孃に渡してくれ給へ……若し君があの人に會ふならばだ。』

『あの人は大變悪いんですよ。』
『ぢや、未だ此處にゐるんだね？してクラーギン公爵は？』と彼は早口に訊いた。
『あの男は疾くに他處へ行つて了つた。君、ナタリヤさんは危く死に掛ける處だつたのですよ……』
『あの人の病氣は僕も非常に氣の毒に思つてゐる。』とアンドレイ公爵は言つて、冷たく、毒々しい、不愉快な、丁度父親のするやうな薄笑ひをした。
『併し、して見るとクラーギン氏はロストワ嬢に、結婚申込の榮を與へなかつたんだね？』とアンドレイ公爵が言つた。
彼は二三度鼻をふん〳〵と鳴らした。
『あの男は妻君が有るんだから、結婚する事が出來なかつたのです。』とピエールは言つた。
アンドレイ公爵は又しても、父を想ひ出させるやうな不快な笑ひ方をした。
『所があの人は、君の義兄は今どこにゐるんだね、知らせて貰へないかしらん。』
『あの男はペテル……いや僕はよく知りません。』とピエールは言つた。
『まあま、そんな事はどうだつていゝ。』とアンドレイ公爵が言つた。『ロストーワ令嬢にさう言つてくれ給へ、あの人は全然自由であつたし、今でも矢張りさうだつて……そして僕があの人の

萬福を祈つて居るつてね。』
ピエールは手紙の束を取り上げた。アンドレイ公爵は未だ言ふ事は無いかと考へてゐるのか、それともピエールが何か言ひ出しはせぬかと期待してゐるのか、兎に角じつと目を据ゑて彼を見守つてゐた。
『ねえ、あなたはあの彼得堡でやつた議論を覺えてゐますか？』とピエールが言つた。『覺えてゐますか、あの……』
『覺えてるよ。』とアンドレイ公爵は急き込んで答へた。『墮落した女は許すべきだ、と僕が言つたんだらう。併し僕は自分が許し得るとは言はなかつたからね。僕にや出來ない。』
『けれど一體これが比較になりますか？……』とピエールが言つた。
アンドレイ公爵はそれを遮つた。彼は鋭い聲で叫んだ。
『もう一度結婚を申し込んで、寛仁大度を示すとか何とか言ふのかい？……さう、大變立派な事だが、併し僕は sur les brisées de Monsieur（あの紳士の足跡を）歩くことは出來ないよ。若し君が僕の親友になりたければ、もう二度とあの女……あの事を僕に言ひ出さないでくれ給へ。ぢや左樣なら。君渡してくれるね？……』
ピエールは此處を出て、老公爵とマリヤの許へ赴いた。

老公爵はいつもより元氣であつた。マリヤはいつもと同じであつたが、其の兄に對する同情の陰から、結婚の破れたのを悅ぶ色が覗いてゐる。それはピエールにも分つた。二人を見てゐる中に、一同がロストフ一家に對してどんなに深い輕侮と、憎惡の念を抱いてゐるかが、始めて彼によく分つた。そして對手は誰にもせよ、兎に角アンドレイ公爵を他の者に見變へた女の名を、彼等の前で口にするさへ不可能だ、といふ事を悟つたのである。

食事の間に話題はもう疑ふ餘地もなく、目前に切迫してゐる戰爭の上へ移つた。アンドレイ公爵はしつきり無しに語り續け乍ら、時に父、時にデサール（瑞西人の家庭教師）を對手に議論した。そして平常より元氣づいてゐるやうであつたが、その興奮の精神的原因はピエールによく分つてゐた。

二二

其の晩ピエールは依頼を果すために、ロストフ親子を訪れた。ナターシャは病床にあつたし、老伯爵は倶樂部へ行つて居たので、彼は手紙をソーニャに渡して、マリヤ・ドミートリエヴナの居間へ行つた。彼女はアンドレイ公爵がどんな態度で報に接したか、それが聞いて見たかつたのである。十分ばかり經つたとき、ソーニャがマリヤ・ドミートリエヴナの部室へ入つて來た。

『ナターシャが是非ベズーホフ伯爵にお目に掛りたいと申しますが』と彼女は言つた。

『え、何ですつて？ あの娘の所へ御案内すると云ふの？ だつてあの部室は片附いてないでせう？』とアフロシーモヴが言つた。

『いゝえ、ナターシャは着換をして客間へ出ましたの。』ソーニャはかう言つた。

アフロシーモヴは只肩を竦めるのみであつた。

『伯爵夫人はいつおいでになるかしら？あの娘のお蔭ですつかり酷い目に合つた。ね、お前さん氣を附けてあけすけ喋つて了はないやうにね。』と彼女はピエールに向いて言つた。『あの娘を叱るだけの勇氣がないんですよ。可哀さうでね、本當に可哀さうでね！』

すつかり瘠せて了つたナターシャは、蒼ざめたいかつい顏をして（併しピエールの豫期したやうに、面目なささうな所は少しもなかつた）、客間の眞中に立つてゐた。ピエールが戸口に現はれたとき、彼女は其の方へ近附いたものか、それとも向うから來るのを待つたものか、決し兼ねた體でまご〳〵して居た。

ピエールは急ぎ足でその傍へ寄つた。いつものやうに手を差し出すだらうと思つたのである。けれども彼女は近々と傍へ寄ると、重苦しげに息をつき、兩手を力なく垂れ乍ら、その儘じつと立ち竦んで了つた。それはよく彼女が歌を唱ふために、廣間の眞中へ歩み出る時と、そつくり其のま

まの姿勢(ポース)であつたが、表情はまるで別であつた。

『ピョートル・キリーロギッチ、』と彼女は早口に言ひ出した。『ボルコンスキイ公爵はあなたの親友でしたね――いえ、あの人はあなたの親友ですわね。』と彼女は言ひ直した(彼女には一切の物が昔さうであつたといふだけで、今は萬事がらりと變つたやうに思はれた。)『あの人が出發の時、あなたに相談しろと申しましたから……』

ピエールは其の顏を眺め乍ら默つて鼻をすゝつた。それまで心中ひそかに彼女を非難して、努めて輕蔑しようとしてゐたが、今は何とも言へぬほど可哀さうになつて、彼の心に非難の居場所が無くなつて了つた。

『あの人は今こゝに居らつしやるんですね。どうかわたしをゆる……赦して下さるやうに仰しやつて……』

彼女は言葉を止めて、忙しさうな息使ひをし始めたが、それでも泣かなかつた。

『えゝ……僕さう言ひませう。』とピエールは言つた。『併し……』

彼は何と言つていゝか分らなかつた。

ナターシャはピエールの心に浮んだ想念を察して、ぴつくりしたやうな風附で、

『いゝえ、もう何もかもお終ひだつて事は、わたしよく承知してゐますわ。』と彼女は急き込んで言つた。『いゝえ、そんな事は決して出來る筈がありません。只あの人に惡い事をしたのが、それがわたし苦しくつて、唯ね、どうかあの人にわたしの事を一切、幾重にも赦して下さるやうに仰しやつて下さい……』

彼女は全身を顫はして椅子にべたりと坐つた。

いまだ曾て經驗した事のない憐みの情が、ピエールの胸一杯になつた。

『僕あの人に話しますよ、も一度すつかり話しますよ。』とピエールが言つた。『けれど……只一つ伺ひたいのは……』

「何が知りたいのだらう?」ナターシャの目が訊ねた。

『只一つ伺ひたいのは、果してあなたが……』ピエールはアナトーリを何と呼んでいゝか分らなかつた。此の男の事を考へたばかりでも顏が赤くなつた。『本當にあなたはあの惡者を愛してゐらしつたのですか?』

『あの人を惡者呼ばりしないで下さい。』とナターシャは言つた。『だけどわたし何(なん)にも――何にも分りませんわ……』

彼女は再び泣き出した。すると憐憫と愛慕の情が、一層強くピエールを襲ふのであつた。彼は眼鏡の下を涙が流れるのを感じた。彼はそれを見られなければいゝがと思つた。

『もう何にも言はない事にしませうね。』とピエールは言つた。

このつゝましく優しい情の籠つた聲が、突然ナターシャの耳に恐しく奇妙に響いた。

『もう何にも言はない事にしませうねえ――僕あの人にすつかり話して置きますよ。併し只一つお願したい事があるんです。若しあなたに助力とか忠言とかゞ必要でしたら、いや單に御自分の胸の中を誰かに打ち明けたかつたら――それも今ぢやありません、いつかあなたの頭のはつきりした時ですよ――その時にはどうぞ僕の事を想ひ出して下さい。』彼はナターシャの手を取つて接吻した。『若し僕になんする事が出來たら……僕は非常に幸福です。』

ピエールは一寸間誤ついた。

『わたしにそんな風の言ひ方をしないで下さい、わたしさうして頂く値打はありません！』と叫んで、ナターシャは部屋を去らうとした。が、ピエールは其の手を取つて引き止めた。

彼は何か未だ言ふべき事があると思つたが、それを口に出したとき、彼は自分で自分の言葉に驚いた。

『お止しなさい、お止しなさい、あなたの生涯はすべてこれから先に有るのです。』と彼は言つた。

『わたしの生涯が？　いゝえ！わたしの生涯はすつかり駄目になつて了ひました。』彼女は羞し

さうに、自分で自分を貶しめるやうな調子でかう言つた。

『すつかり駄目になつたんですつて？』彼は鸚鵡返しにかう言つた。『若し僕が今の僕でなくつて、世界中で一番美しい、一番賢い、一番優れた人間で、そして自由な體であつたなら、僕は今直ぐこゝに跪いて、あなたのお手と愛を求めたでせう。』

ナターシャは長い〳〵幾日の後、始めて感謝と喜悅の涙を流して泣いた。そしてピエールを一寸見上げてから部屋を出た。

ピエールも同樣その跡に續いて、殆ど走るやうに控室へ出た。咽を締めるやうな歡喜と幸福の涙を押し堪へつゝ、幾度も袖へ手を通し損ひながら、外套を着て橇に乘つた。

『これから何方へ參りませうで？』と馭者が訊いた。

「何處へ？」とピエールは自問した。「今何處へ行くところがある？倶樂部か、訪問か？」彼は自分の經驗しつゝある愛と歡びの感情に較べると――ナターシャが最後に涙の隙から自分を眺めた、あの柔いだ感謝に充ちた目に較べると、すべての人間が哀れに貧弱に思はれた。

『家へやれ！』とピエールは言つた、零下十度といふ寒さも構はず、熊の毛皮外套の釦を外して、悅びに呼吸する廣い胸を露はしながら。

空氣は寒く冴え返つてゐた。汚く薄暗い往來や黑い屋根の上には、暗い星空が擴つてゐた。空

ばかり眺めてゐたピエールは、高翔せる自分の心に較べて腹の立つほど下劣な、地上の一切に氣が附かなかつた。アルバート廣場へさし掛つたとき、暗い星空の偉大な全面積が彼の目前に開けた。此の空の殆ど眞中、プレチステン並木街(ブリヴール)の上に當つて、砂を撒いたやうな夥しい星に四方から取り捲かれながら、地球に近い位置と、白い光りと、上の方へ撥ね上げた長い尾とで、他のどれよりも一きは目立つ、千八百十二年の巨大な目眩しい彗星が懸つてゐた——それはあらゆる恐怖と、世界の終焉を豫言すると言はれた彗星である。しかし此の輝かしい長い尾を曳いた明るい星は、ピエールの心中に何等の恐しい感情をも呼び醒さなかつた。それどころか、彼は涙にぬれた目で此の明るい星を悦ばしげに眺めた。言葉に表す事の出來ない程の速力で、拋物線を畫きつゝ無限の空間を飛んでゐたものが、急に大地へ突つ立つた矢か何ぞのやうに、黑い空の此の一點を選び出して、ぴんと威勢よく尾を上へ立て乍ら、他の數限りない星の瞬きの間にあつて、白い光を躍らしてゐる星——此の星こそ新生を望んで花を開いた、優しく活き〳〵した自分の心の狀態に、相應ずるもの、やうに感じられた。

——第二卷了——

戰爭と平和第二卷
定價三圓

大正十四年八月二十日印刷
大正十四年八月廿五日第一刷發行

東京府下淀橋町柏木一〇一二番地
譯者　米川正夫

東京市神田區南神保町十六番地
發行者　岩波茂雄

東京市牛込區榎町七番地
印刷者　渡邊八太郎

日清印刷株式會社

發行所　東京市神田區南神保町十六番地　岩波書店
電話四谷五八七〇番・七一六七番
振替東京二六二四〇番

版權所有

戰爭と平和 第一巻

トルストイ作 米川正夫譯 四六判 定價三圓 六八〇頁 送料書留廿七錢

これは藝術家及び思想家としての卜翁の偉大さを、質量ともに最も完全に示した驚異すべき作品である。十九世紀初葉の露西亞を材に取つて、奈翁を始め皇帝宰相武將等無數の史的人物を紙上に活躍させ、奈翁の露國侵入、莫斯科の炎上、佛軍の敗走等著名な史上の大事件に、新しい人間的解釋を施すと共に、透徹した觀察と深刻な體驗と豐富な想像を驅使して、當時の貴族社會の複雜多面な生活相を描破した長編歴史小說で、その構想の雄大、描寫の迫眞、思想的含蓄の深邃、すべて十九世紀の世界文學が生んだ最大傑作の稱に背かぬ。

譯者は久しい以前に此作の飜譯を公にしたが、今度關係書肆の諒解を得て舊譯を廢棄し、此改訂譯を定本として世に問ふこととした。舊譯に對して感じてゐた多くの不滿が、本書によつて一掃せられたことは譯者の大なる欣びである。(譯者)

トルストイ戯曲全集

米川正夫譯 四六判 定價三圓 七四五頁 送料書留二十五錢

岩波書店

538
144

終